

かけた時に、殿りにまはつた主人の獨歩は、すでに平らげつくされてゐた菓子鉢にマッチを一つ入れて、釣ランプを細く暗くした。

「田山が歸つて来て、がちりとやるから、見てゐたまへ。」

いたづら好きの獨歩はにつこりしながら、すぐ前に行く一人にそつと囁いた。一時間ばかりの後である。

どや／＼と歸つて来て、みんなが二階にあがつたと思ふと、

「お、こいつはうまい！」

いきなり田山さんは指でつまんで、がちりと囁んだ。

「それ、囁んだ！」

獨歩はにこ／＼してランプの光をあかるくした。

みんなが見ると、田山さんはペッペッと口を拭つてマッチを抛り出してゐた。みんな一度に嘖き出して、から／＼と笑つたのである。

○

ある婦人雑誌の懸賞小説の選料を突返した話なども、傳へられてゐるのはずいぶん事實とちがつてゐる。これを受取つて貰ふためには、わたしも一役を演じさせられたので、その真相を書いておきたいのだが、これは他にさしさはりのある事でもあるし、豫定の紙數をもすでに超過した事であるから、今は割愛する。

「書物展望」・昭和十三年九月十三日

## 田山花袋の一面

「停車場はやがてやつて来た。Mは下りてほつとした。Tも面白いと思つた。NはTが切符をあちこちとさがし廻すのを見て、元の客車の中に行つて、そこに落ちてゐたのを拾つて来て呉れたりした。

『相變らずそそつ、かしいな。』といふ顔をしてMもNも笑つた。

といふ一節が、田山（花袋）さんの『三人』といふ短篇の中にある。このTは作者で、Nは中村白葉君、Mは私だ。「相變らずそそつかしいな」と作者が自分でも書いてゐるやうに、田山さんのそそつかしいのは有名で、いろ／＼な逸話なども傳へられてゐる。

## ○

夏の或朝、——田山さんは有名な早起きだが、——その朝も獨りむつくりと早く起きると、いきなり、そこにかけてあつた浴衣に着換へて散歩に出た。

行き逢ふ人が、なにがをかしいのか、誰も彼も、妙に笑つたやうな顔をしては過ぎて行く。

「へんな奴らだ！」

田山さんは心に思ひながら、いつものやうに一まはりそこらをぶらついて歸つて来た。

あとから起きて、掃除などしてゐた家人が、それを迎へた途端に、呆れた聲を出した。

「まあ、なんて恰好です！ それで、散歩していらしたんですか？」

「さうよ。何がをかしい？」

「だつて、御覧なさいまし。衣紋竹が肩の上に突つばつてるぢやありませんか？」  
「む！」

と手を肩のところにやつて、衣紋竹の端をつかむと同時に、田山さんはわつははと笑ひ出した。

「それでだ。みんながへんな顔をして、くすくす笑つて行つたのは。いやに糊が利いて、ぎわぎわ突つばるとは思つてゐた。わつははは。」

その爆笑には家人も一しよになつて笑ひころげずにはゐられなかつた。

——といふ話は、明治の末葉、氏が四十歳ぐらゐのころのことだが、せつかちで、そそつかしやであつたことは、ずつと昔からである。

○  
マッチを羊羹とまちがへて、がちりと噛んだといふ有名な話などもその一つである。

○  
さういへば田山さんは羊羹が非常に好きだつた。殊に本郷の藤村の羊羹が好きで、少しでもそつちについてがあると、よく自分でまはつて買つたりしたが、後に、新宿に中村屋が出来てからは、近いので、そこで買った。  
或ひは若い頃から日光にしばし遊んだので、あすこの羊羹から癖がついたのかとも思はれる。

○  
田山さんの小説には、よく小道具の使ひ誤りがあるといつて、人に指摘されたこともある。例へば、驛長が發車の笛を吹いたり、混合列車の急行が走つたり、タイプライターが海老茶の袴を穿いて歩いてゐたり、青年達が野原でベースボールを投げてゐたりする類で、澤山ある。

いふまでもなく、そそつかしやの思ひちがひである。

○  
ところが、さういふ大ざつばな性格の人であつた半面に、實によくこまかい事に氣がつく人でもあつた。或時、一緒に旅行して、上州の前橋の宿屋に泊つた晩、わたしは兵兒帶を枕元におきばなしにして寝ようとする、「おい／＼、宿屋でそんなところに帶をおくものがあるか。いつ首をしめられるか分らんぢやないか」と注意されたのもその一つであるが、もう一つ、わたしが今でも顔を剃らうとする度毎に思ひ出すことがある。それは田山さん及び窪田空穂、岡村千秋、中村白葉の諸君と共に水郷めぐりをした時の事である。潮來いたこの宿に泊つた翌朝、わたしが顔を剃らうとして、湯呑に少し残つてゐた水に鐵瓶の湯を注がうとすると、

「ばかばかばか！」

と、突然、大きな聲で田山さんに嘔鳴りつけられた。わたしはびつくりして、呆れて鐵瓶の手を控へてゐると、田山さんは疊みかけて、

「ばかだな、君は。水へ湯をつぐのは湯瀧の時だけだ。湯を先についで水をうめるんだ。」

はじめてそれを教へられたのは、その場でもわたしだけではなかつたのである。

—『三代名作全集月報』・昭和十六年十月二十日—

## 田山さんの『近代の小説』から

—

田山さんの『近代の小説』を久しぶりでまた開いて見た。はじめて此書が出版されたのは大正十二年の春で、その時一度はすぐに読み通したし、その後も明治大正文壇のことを何かと思ひ起さうとする時には、わたしはよく此書の中から追憶の手がかりを求めて来た。

『近代の小説』といふ書名を見ると、何か西洋小説の評論か文學的研究かのやうにも思はれるが、實際は田山さんの文壇生活體驗記とでもいふべき一種の隨筆である。極めてざつくばらんな明治大正文壇史である。従つて其敘述は、著者一

個の觀察、感じ、知識に其力點がおかれてゐるので、時に偏頗で公平を缺いてゐるかと思はれるやうなところも多少はあるやうだし……いや、そればかりではない、元來が性急で「僕はかう思ふ」を連發しながら、しきりに斷定を下すのが生得の癖であつた著者の事なのだから、その斷定の前提の事實がすでに早呑込の錯誤に陥つてゐたりするやうな場合もないことはなかつたらうとも思はれるが、しかも、根が眞正直で、率直で、いかなる場合にも斷じてわざと歪曲した敘述などをするやうなことの絶對になかつた人の體驗記だから、さういふ點で、いつになつても明治大正文壇風景の一面觀として、津々として盡きない興味之源となつて存留するであらうと思はれるのである。殊にわたしに取つては、此書の後半の大部分が、著者と共に見て来た文壇の事實の敘述であるから、時に或ひは自分の過去の眼や心をそこに見出す懐しさもあるのである。例へば、「龍土會の濫觴」を説いたところに、

「その當日の獻立表を見て、有明君が『こいつは素敵だ！ 風骨會は素敵だ！』  
と言つて、例の哄笑をやつたことを私ははつきりと思ひ出すことが出來た。」  
とあるのなどを見ても、恐らく一般の讀者には、有明氏の「例の哄笑」が、何の  
先觸もない唐突で、殆ど何の聯想も、想像も、従つて感興も起つて來ないであら  
うと思ふが、わたしにはすぐに蒲原さんの上半身を大きくゆすつての哄笑が髣髴  
として眼に浮んで來るのである。

ついで島崎さんの事を書いたところで、田山さんは島崎さんが熱心に、まじめ  
な心持で藝術に奉仕してゐたことを感激した調子で述べて、

「しかし、會に出て來ては、島崎君はあまり多く饒舌る方ではなかつた。大抵  
は沈黙してゐた。時には岩野君や、國木田や、または私などの言つてゐること  
に反對してゐるのではないかと思はれるやうなこともないではなかつた。もつ  
ともつと考へなければならぬ。かう言つてゐるやうに見えた。その意見を求

められた時には、物でも挟まつてもゐるやうに頻りに齒を吸ふやうにした。  
矢張多くは黙つてゐた。」

とつゞけてゐるが、ここでもわたしには、「物でも挟まつてもゐるやうに、頻り  
に齒を吸ふやうにした」といふ一句が、完全にその時の島崎さんの姿を眼前に描  
き出させてくれるのである。吸ひかけの巻煙草を口から二三寸はなした先きに、  
指先にはさんだまま水平に支へながら、口許を歪めて、すい、すいと奥齒を  
吸ふやうにした恰好が、實にはつきりと目に浮んで來るのである。さすがに田山  
さんは微妙なところを捉へてゐる。

さういへば、島村さんと須磨子との一大悲劇に筆が及んだところにも、

「かれは訪問者の前でもこらへることが出來ないと言つたやうにして、大きな  
あくびをしたといふ。それは退屈な人生に對してではなかつたか。色彩のない  
平凡な思ひのままにならない生活に對してではなかつたか。私はそれを考へる

と、その時代の思潮が、かれの上に常に最もよく具體化されてゐたことを思はずにゐられなかつた。」

と書いてゐる。島村先生の「大きなあくび」は、早稻田出の者の間では、殆ど誰もかも知つてゐたほどに有名なものであつたのだから、或ひは田山さんにはわたしでも話したのであつたかも知れないが、しかもそれをよく記憶してゐて、そこからすぐに「退屈な人生」を引き出して來たところなどは、『毘』を書き、『一握の葉』を書き、『孤獨』を書いた著者の心の共鳴も推測されて、いかにも田山さんらしいと思はせられるのである。

## 二

この書はまた明治文學の發祥時代についても示唆するところが少くない。わたしに取つても幾つか追憶の緒を與へてくれる。

ずつと始めのほうに、露伴さんの旅行記の『枕頭山水』の事を書いて、その中の『突貫紀行』を殊に忘れられないものであつたと言つて、「そこにははつきりとかれが出てゐた。若い強いかれが出てゐた。北海道の電信技手の職を捨て、本だの着物だのを賣つて、それを旅費にして、徒歩旅行で東京へと歸つて來たさまは、今でもはつきりと私の眼に残つてゐた。あの人跡の稀な七戸あたりで、やたらに食はせる茸に當てられて、腹が痛んで終夜眠られなかつたことや、野蒜から松島に來て、鹽竈で一文なしになつたさまや、仙臺でやつと少しばかりの金を工面して、夜通し歩いて、その時分やつと出來たばかりの郡山から汽車に乗つて歸つて來たさまや、その福島から二本松に來る並木松の下で月の明るい光の中に仰向に倒れて人生を思つたさまなど今思つてもはつきりと私の眼の前に浮んで來る。」と書いてゐる。この『枕頭山水』はわたしも少年時代に最も愛讀したものの一つであるが、それには、わたし自身もまた、そのころ電信技手——正しくいへ

ば電気通信技術員、通信書記補——であつて、纒かにそれで生活の資を得ながら、ひそかに文學に志してゐたからといふこともあつたのである。

わたしは明治三十一年の四月に二十歳足らずで、そのころ江戸橋のそばに在つた東京の本局へ甲府から轉任して來て、その夏には、光榮にも其年はじめて郵便電信學校に置かれた通信科といふのへ入るやうにと選抜されたのだが、それに入ると、五ヶ年の義務年限がつくので、その長きを嫌つて拒絶した爲に、それまで大いに厚意を見せてゐてくれた秋山さんといふ主幹の逆鱗に觸れて、忽ち木挽町の支局へ轉任させられたのである。歴史的な言葉でいへば左遷されたのである。

ところが、木挽町の支局の主任の佐治さんといふ人は、以前、北海道で露伴さんと一しよに勤めてゐた人で、露伴さんの事をいろ／＼と話して聞かせてくれた。ひまな時にはよく中繼紙を裏返して、そこに文章を書いて推敲してゐたなども話してくれた。わたしが將來文學をやりたいといふ事にも理解があつて、「第二の

露伴になりたまへ」などといつて、しきりにカづけてくれたりした。

木挽町の支局は歌舞伎座の眞前の采女町に在つて、電信ばかり取扱つてゐたが、一方に當時の新聞街であつた銀座を控へてゐた外に、他方に築地の居留地を管内にもつて歐文電報が非常に多かつたので、支局の中では最も重きをおかれた一つであつた。わたしは下谷の仲御徒町の汚ない路地裏の素人家の二階から隔日毎に朝早くてく／＼と出かけて行つて、其夜は宿直で、翌朝、つぎの番のものと交替してまたてく／＼と歸つて來た。優に一時間以上はかかつた。今の萬世橋驛のホームの下あたりに當るところに在つた萬世橋——俗稱めがね橋——を渡つて、連雀町から小川町へ出、神田橋から丸の内へ入つて數寄屋橋へと抜けるのだが、そのころの丸の内は、見るかぎり茫々とした一面の草原であつた。ただ馬場先門外の一角に郵船會社などの赤煉瓦が建ち並んでゐた外には、そして左のはうにはるかに鍛冶橋の古風な監獄が見えてゐた外には、有樂町のごみ／＼した小さな、低



い長屋などのあるところまで何にもなかつた。ところ／＼に水溜りがあつたり、たまに小高い塚みたいなものの上に一二本の木立があつて緑の涼しい木蔭をつつたりしてゐる外には、細い小徑が生ひ茂つた草原にうね／＼と通じてゐるだけだつた。何かで交替がおくれて朝も十時を過ぎたりすると、草いきれでたまらなく暑かつた。

わたしは宿明けの日の晩、即ち隔晩に神田の國民英學會に通つて、英語を勉強したが、村井知至先生のユーモアに富んだ譯讀や平井金三先生の熱を帯びたエロキューションなどは、今もあり／＼と思ひ起される。が思へば、それもこれも遠い昔の事である。

### 三

田山さんは、和歌は桂園派の直系を傳へ、新體詩時代の詩人としてはやさしい、

あえかなものを作つた上に、小説も初期のものは清純な美しい少女にあくがれたものが多く、センチメンタルなので最も聞えてゐたが、心おぼえの日記などはよく漢文で書いてゐた。博文館の編輯室で、わたしはよく田山さんが禿筆を嚙みながら、常用日記の其日々の狭い一劃に、簡単に要領を得た記録をとどめてゐるのを見た。少年時代には主として漢詩を作つてゐたらしいが、その興味がはるかに晩年になつてから復活して、大正七八年から其死にいたる約十二三年の間におよそ二千五百首以上の絶句や古詩を作つてゐる。今はここに其今昔の感を偲ばしめるに足るものを一首だけ試みに掲げて見る。

少時作詩用古桐軒主人號。實非有其軒。忽忽四十餘年。今園居

修屋。齋前梧桐數株。名實初全。一夕雨至。感得一絶。

記名年少無其實。冊載江湖塵夢昏。又是錦城歌吹海。一宵聽雨古桐軒。

## 島崎藤村氏の『海へ』

— 苦しい生活の威壓 —

N君。この間はたび／＼おはがきをありがたう。最初に頂いたあの繪はがき、「藤木川の溪流」を手にした時は、わたしは懐しさにぢいつといつまでも見入つてゐました。あの溪流に架けられた橋。あの橋を渡つて行くと少し小高くなつた所に湯ヶ原の公園があります。あの繪はがきにも一角だけは見えてゐました。

あの公園へ、あの橋を渡つてわたしが登つて行つたのは、左様、もう幾年前になりませうか、あそこから遙かに望み見た土肥の郷の印象は今だに鮮かでありませんが、其の年月は忘れてしまひました。けれども人間は不思議なものではありません。

せんか。時こそ如何に隔つても、忘れられぬのは當時の心持です。何を隠しませう。わたしは其の時、あそこへ忘れられぬ人のわた跡を懐ひ偲びに行つたのです。そしてその背景に、のがれられぬ自分の生活に對する苦しい心持が潜んでゐたことも。……併し、これは、どうなり君の好きな解釋に、君の自由な想像に、お任せすることにいたしませう。

さういふわたしの思ひ出を包んでゐる湯ヶ原へ、君は「休息」に行かれたといふお便りでした。わたしはあの溪流と共にこの「休息」といふ文字にも強く心を惹かれました。そしてわたし達の生活といふものを深く考へずにはゐられません。さういふ最中にわたしは島崎さんの『海へ』を讀み、田山さんの『晴れた日の午前』を讀みました。『晴れた日の午前』は、わたしに宛てた手紙の體になつて居りました。そしてそれを讀んだ時のわたしは、渾身の力が感激の涙になつて溢れ落ちるのを感じました。久し振りでわたしは魂の武者震ひを感じました。

この時ほどわたしの現在の生活が、生命を一日一日と削り落して行く現在の生活が、無意義に感ぜられたことはありませんでした。

「かうしてはられない、」といふ心持が、漲るやうにわたしの胸に湧いて來ました。

そこへまた、どうすればかういふ事が起るのでせう。突然も突然、不意も不意、昨日まで何ともなかつた窪田君の細君が、今日はもう死の前に身を投げ出して、而かも少しも悪るびれない覺悟をわたし達に見せてゐるではありませんか。わたしは彼女の臨終の床に侍して、永久の眠りを眠るために看護婦の手で目を瞑らせられるのを見ながら、何といふはかない人間の生命かと、今さらのやうに嗟嘆の頭を低く垂れて、ぢつと坐つてゐました。

窪田君の所には、御存じの通り、十歳の男の子と五歳の女の子とがありません。吹き荒んだ一夜の嵐に母親を奪ひ去られたこの可憐な二人の子供の事を思つてゐ

ると、忽ちわたしの眼の前には、『海へ』の中に書かれた島崎さんの「東京淺草の舊い住居」がありありと浮んで見えて來ました。八角形の古い柱時計が見える。

それは、「過ぐる三年の間、一刻も私に休息を與へなかつた母のない子供等の養はれて居たところだ。母鳥の亡い後は、私は雛のために餌をさがしてやる雄鶏であるといふばかりでなく、自分の幼いものを羽翹のかけに隠し、絶えず庇護し、絶えず注意し、絶えず心配する役目までも、一身に引受けなければならなかつた。」といふ島崎さんの日常生活。それと同じ生活を、わたし達の仲間でも既に水野君が二年前から營まれてゐます。そこへまた窪田君が、新たに同じ怒濤の中に巻き込まれたのであります。ほんとに人間の生活は、いつ顛覆するかも知れない舟のやうなものであります。大船に乗つた氣で安心などしてゐられるものではありません。のみらなず、一旦舟の覆つた時に、全く泳ぎを知らなかつたならば、どうまあ怒濤と戦つたらよいでせう。

海へ出掛けるまでの島崎さんの心持が、どんなに苦しい、張り詰めたものであつたか。それは心からまことの生活を欲してゐる者には、多分見當がつくであらう。島崎さんが出掛けられた年の一月の事でありました。ある晩、わたしは島崎さんと一緒に、柳橋から濱町の方へ大川端をぶら／＼歩いてゐました。ちやうど、矢の倉の福井樓の前あたりを通つてゐた時でした。

「一つ思ひきつて、長い旅をして来ようかと思ひます。」

かう島崎さんは落ちついた聲で重々しく言はれました。その時は、わたしも七年間の勤めを思ひきつて止さうかと思つてゐた時でしたから、思はず強く胸の迫るやうな氣がいたしました。この先輩にして、十重二十重に人生の蜘蛛の圍に繋縛されてゐるこの先輩にして、なほ且つ生活の更新をはかつてゐられるではないか。それなのに、自分のやうな未熟な者が何をぐ／＼と躊躇して、暫時の安きを偷んでゐようとするのであるか。わたしがあの時、寧ろ進んで浪々の身となつ

たのには、さういふ感激の心に叱咤され、鞭撻され、驅り立てられて、快く興奮した點もありました。

併しN君。島崎さんの心持には、曾てのあの重苦しい調子が上から威壓するやうに垂れかゝつてゐるらしいではありませんか。それは『海へ』を讀んだ者の誰しも感ずる所であらうと思ひます。けれども只一つ、あの何處までも一貫した重苦しい調子を和らげるために、——と言つても差支なからうと思ひますが、——島崎さんは其の表現を全く詩の領分に持つて行かれました。そこに明るいつランス文學の極めて著しい影響があるとは見られないでせうか。人間の生活はすべて苦しい。其苦しい生活を楽しく苦しまうといふ所に、觀察を唯一の武器とする藝術家の不幸な幸福の生活が展けて來はしないでせうか。『海へ』をたゞの紀行文だと言つて看過する人などもあるとの事ですが、さういふ人には人間のほんとの心理は到底分らぬだらうと思ひます。

## 田山花袋氏の印象

——不機嫌な顔、にこにこした顔——

汗と埃とに塗れて、暑かつた七月の旅から歸つて来て見ると、机の上には手紙や雑誌が可なり澤山溜つてゐた。田山花袋氏の印象を書かないかといふN君からの手紙も其中に交つてゐた。

田山さんの事なら、わたしは随分知つてゐる方である。前から見ても、後ろから見ても、横から見ても、縦から見ても、何でも造作なく書けようと思つた。書くか書かぬか返事をせよといふことであつたから、快く書くことに返事をしてゐた。

ところが、いよ／＼書かうとして田山さんの面影をかう目の前に描いて見た。

忽ち、むつつりとした不機嫌らしい顔も出て来れば、にこ／＼と笑つた顔も出て来た。満員の電車でも構はずにがむしやらに飛び乗らうとする其の大きな後ろ姿が見えて来るかと思ふと、日光の山寺の電燈の暗い部屋で、悪酔ひした苦しさを絶叫しながら、太い腕を蒲團の外へどさりと投げ出す所が見えて来たりした。明るい顔をした女達の前で、いゝ機嫌に酔つて、首を掉り／＼萬葉の長歌を、「しなてる片足羽河の、さ丹塗りの大橋の上ゆ、紅の赤裳裾引き」と歌ふかと思へば、月の瀬から柳生を過ぎて笠置へ登る細い山道を、一行五人の者の先頭に立つて、少しの疲れも見せずにはさつさと歩いて行つたりした。参謀本部の地圖を幾枚か擴げた上に、蔽ひかぶさるやうに目を据ゑて旅行談をするかと思へば、……さうだ。田山さんが演壇に立つて、後で聞いたらそれが處女演説だつたさうだが、本當に處女のやうに顔を赤めながら、ぼつり／＼と話し續けられた時に私は初めて田山

花袋といふ人を見たのであつた。

何を書いていゝのか、大きなゴム毬を撫でてゐるやうで、中中糸口が見附からなかつたが、これでやつと探りがついた。――

それは坪内先生の令甥である鋭雄さんが、今の士行君の兄さんが、大石橋で戦死した時の實況を、同じ軍に従つてゐて見て来た田山さんが、矢來俱樂部で開かれた鋭雄さんの追悼會の席上で語られたのであつた。正面には故人の寫眞が飾られてゐた。オリーブ色の卓子掛をかけた小さなテーブルが其の前にあつて、お定まりのコップと水差とが其の上に載つてゐた。

やがて其處に、白地の單衣に黒縞の紋附羽織を着た田山さんが立つたのである。戦地から病氣で歸つて来た直後のことで、まだ蒼ざめた顔色をして瘦せてゐた。そして其處で、先にも言つたやうに、ぼつり／＼と、時々絶句しながら戦争の光景を語つて行つた。併しそれは描くがやうにであつた。彈丸が飛んで来て、

炸裂したかと思ふと、鋭雄さんの姿はもう見えなかつたといふ所に來ると、田山さんの聲は震へた。其の大きな目は潤んでゐた。聽いてゐた者は皆な涙を呑んだ。暫く室内はしいんとした。

ちやうど苧心の『四日間』が『新小説』に載つた時分のことで、それを翻譯とは誰も知らなかつたから、作者は誰だらうと文學好きの青年達は寄るとさはると物色してゐた。この席上でもまたそれが問題となつて、わたしの友達の一人は五十嵐力氏に向つてかう訊いたりした。「先生だといふ説がありますが、さうですか？」と。五十嵐氏は併し其の頃創作に遠ざかつてゐたが、巴千の名はまだ全く忘れられてはゐなかつた。――考へて見ると、ほんとに人間の世の中つて長いものだ。

その次ぎに田山さんと逢つたのは、本當に田山さんと直接に言葉を交したのは、其の翌年の初夏の頃であつた。『草枕』といふ紀行文集を隆文館から出すことになつて、其の口繪に入れる風景の寫眞のことで、わたしは隆文館員として牛込辨天

町のお宅に初めてお訪ねしたのであつた。門をはひつてずつと奥の突き當りの二階家が田山さんの住居であつた。その門内には外にもまだ幾軒かの家があつて、その一軒の家の色の白い美しい娘さんは、田山さんに「朝寝髪日長たけて結ぶ……」と歌はせるやうな興味を起させたほどに毎日きつと朝寝をして、起きると直ぐに縁先きで丁寧に髪を結んだりお化粧をしたりして、殆んど半日費したとかいふことだつた。

其の二階家の二階の取りつきの部屋の北向きの窓の下で、田山さんは大きく胡坐をかいて何かの原稿を書いてゐた。わたしは其處で初對面の挨拶をしたのだつた。

人はよく田山さんの第一印象を語る時に、頑健な木強漢のやうにのみいふけれども、もしあのもちやんと生えた手の甲の黒い毛の下の皮膚の色の蒼白さを見逃さなかつたならば、ともすればほろりとした初期のあのセンチメンタリズム

を、そして今もなほ少からず其の痕跡を留めてゐるあのセンチメンタリズムを、さして不思議とはしなかつたであらう。

その時の用件は極めて簡単に片附いた。山と水との風景の寫眞を四枚であつたか、八枚であつたか、どういふ風に組み合せたらよいかといふだけのことだつたから、あのせつかちの田山さんがさう手間を取りやう筈がなかつた。わたしはそこそこにして辭して出た。——それきりで若し後に深い密接な關係が生じなかつたならば、この訪問も或ひはたゞ通り一遍の何でもないものになつて記憶から薄らいだかも知れなかつた。

所が、また其の翌年の、確か二月の五日であつたと思ふ。時は夜。わたしは北山伏町の奥まつたお宅の四疊半の書齋で三度目のお目にかゝつた。「兎に角田山君の所へ行つて御覽。」かう坪内先生に言はれて、先生からの添書を持つて先生の余丁町のお宅から暗い道をてくてくと焼餅坂に出て行つたのであつた。わたしは其

の時、『文章世界』の記者になるべく推薦されて、主筆の田山さんに逢ひに行つたのだ。おめがねにかなふや否や、わたしが胸に不安を抱いてゐたのはいふまでもない。

ところが、やつと座に着いたかと思ふと、田山さんは机の脇から「文章世界第一號立案」と書いた覚え書きを取つて、それを二人の間に擴げた。そして、「こんな風にやつて見ようと思ふが、どうだらう」といはれた。わたしは聊か戸惑ひした。……

かう書いてゐたら果てしがない。つい此の間もお目に懸つた時は、『柳暗花明』の巻頭の『孤獨』の話になつて、其の中の待合のことをわたしが言ひ出すと、「あの時分は僕もデカダンだつたんだねえ。」と田山さんは言つて、「今こそ後生を願つてゐるけれども」と付け加へて笑はれた。

其の間には十何年かの月日が経つてゐる。この長い月日の間にわたしはどんな

に多くの事を教へられたか知れない。殊に、一旦かうと思ひ込んだら、屹度それを實行して、どしどし効果を擧げて行くといふ其の態度には、わたしは常に敬服してゐる。



## 上司小剣氏の印象

——聰明て超然としてゐる——

「大變な所へ移つたね。便利が悪くないかい。」

今月の初めのある晩、帝劇の幕間を廊下に意味もなく立つてゐた時に、わたしは一緒であつた徳田（秋聲）さんからかう尋ねられた。

「いゝえ。それほどでもありませんよ。」とわたしは答へた。「少し田舎過ぎたかも知れませんが。」

「一體どう行くんだね。」

「目白の停車場からぢきです。五六町もありますか。」

「そんな事はない。」と、其時そばにゐた上司さんがふと性急に口を入れた。

「僕の所の倍ぐらゐある。三倍ぐらゐるかも知れん。」

「そんなことはありませんよ。時間で十分ですから。」

わたしは其の日、偶然にも出がけに時間を計つて來たので固い自信を以て言つた。

「いや、そんなことはない。」と上司さんはそれにもかゝはず斷乎として繰返した。「あれを十分で行くとすれば君の脚はよつほど早いのだ。僕の所は（目黒の）停車場から四町しかないが八分かゝる。君の所が十分といふことはない。羽仁君が僕の所へ來た時にも倍は確にあると言つたのだ。其の婦人之友社から君の所へはまだ餘程あるのだからね。」

わたしはその時、「上司さんがまた始めた」と思ふと、腹の中ではくすぐつたいやうな氣持がしたが、さりとて無理に押し詰めて見るほどのことでもないと思つ

たので、早速陣を引きかけた。

「さうでせうか。さうかも知れませんが。」とわたしは曖昧な言葉で妥協の道を急いだ。

「さうだよ。」

上司さんは更にきつぱりとかう言つて、其の話に止めを刺した、

併し、話はさうきまつたけれども、事實は少しも變りはない。わたしの家から目白の驛へは、四角に歩いて行つても十分しかかゝらない。もしまつすぐに畑を一つ横ぎつて、小さな森の片隅を抜ける近路を取つたならば、八分もかゝらずに行き着ける。婦人之友社との距離は依然として一町そこ／＼である。

……ところで、わたしは上司さんに、ちよつとさういふ横車を押す癖が、咄嗟に態度をきめてしまつて、其の主張を押し通さうとする癖があることを言はうとしたのである。そしてそれを知つてゐるものは、世間にはあまりないやうだが、上司

さん自身は實によく、殆ど無意識になるまでよく知つてゐるらしい。

この「知つてゐるらしい」ところを「知つてゐる」としておいて、わたしはわたしの論理を進めて見る。即ち上司さんは自分の癖を知つてゐる。恐らくは其の癖のよくない癖であることを知つてゐる。知つてゐるから用心してゐる。用心してゐるから滅多にぼろを出さないが、どうかすると、親しい人達の間などで、稀れに、ふとした油斷のある時に、咄嗟に、性急に横車を押ししてしまふのである。が、さういふ時でさへも、時に依ると、少し経つてから極めて婉曲に車を縦に押し直さうとすることがある。過則勿憚改の君子である。

しかし、上司さんを君子とすれば薄氣味の悪い君子である。ちよつと見には不得要領然としてゐるが、實は極めてよく要領を得てゐるからである。尤も、其の要領の得かたに於いて、稀には横車が胸の中に横たはつてゐることもあるであらうと思はれることはある。けれども其の横車を押し出すことは、前にも言つた通

り、いや必ずしも横車ばかりと限らない、縦車さへも上司さんは滅多に表へは押し出さない。たゞ要領を胸に疊み込んで、黙つて、時に依ると、そつぽを向いてさへゐるのである。

ある人はこれを解して、上司君が聰明だからだと言つた。それはさうに違ひないが、わたしは「聰明だからだ」の上に、聰明の人の常として、餘計な責任を避けようとするからだと言つた。上司さんは確に責任を好まぬ人である。いや、自分から出て行く人間本来の責任は果たして行くが、他から背負はされる責任を感じることはこれを好まぬ人である。

氏の作品をよく讀んだ人は知つてゐるであらうが、そこにはソオシヤリスチックな思想は勿論、アナキスチックな思想さへも少からず撒き散らされてゐる。ある眞直な人達は、それに對して氏が幾重かのベエルをかけておくことを物足らなく思つて非難したりするけれども、それは向う見ずの盲滅法といふものであ

る。さういふ表現の爲に、思ひもかけない責任を背負はされて苦しい思ひをしたところで、何になる。『日本外史』を書いた山陽は無事に天年を全うしても、維新の大業は成し遂げられた。今蒔いた一粒の種子がどんな花を着けるかは來年の春になつて見ないと分らない。この冬のうちに花を看ようとするやうな性急なことをすれば却つて種子は芽を吹かずに腐つてしまふであらう。

人から背負はされる責任を好まぬ上司さんは、従つて他との交渉の深くなることを欲しない。が自分から感ずる責任は、きちん、きちんと果たして行く。これはまた几帳面すぎるくらいである。さういふ點でも可なり自己中心の人だといへる。わたし達が連れあつた旅の失敗談などをすると、「だから僕は旅は一人でする。」と上司さんは事もなげに言つてしまふ。失敗した事實よりも、失敗を招くに至つた原因そのものの方を先に感じて、其の煩はしさの不快に堪へられないがためである。いつであつたか、正宗白鳥氏と二人で京都まで一緒に行つて、ふ

と何處かの街角で、何の豫期も、何の相談も、もとより何の不和もなしに、右と左とに別れたまゝ、お互ひに自分の勝手な方向を取つて、別々にそれから幾日かの自分達の旅を續けたといふ話がある。

もう一つ。……わたしは上司さんと逢つて其の顔を見る度毎に、この人の中には何かまだ眠つてゐる物があるといふことをいつでも感じる。しかし其の眠つてゐるといふ状態が、覺めずにゐるのか、覺まらずにゐるのか、それはどちらともわたしには言ひきれない。たゞそれがもし目覺めた時は、何か恐ろしいことが勃發するであらうといふやうな豫感がある。……が、しかし、多分は永久に目覺めずに、もしくは目覺まらずに、其の儘であるであらうともまた思はれる。

—『新潮』・大正六年十一月—

## 片上伸氏の印象

—高く秀てたひろい額—

片上君の歓迎會が麻布の龍土軒で開かれた晩であつた。ある雑誌のゴシップの中に、片上君がまだロシアにゐた時分、今パリにゐる吉江君と、日本にゐるわたしと三人の間で、頭の禿げ加減を通信し合つてゐたといふ記事が出てゐるといふ話を友達の一人から聞かされた。

それを聞いて、片上君とわたしとは相顧みて苦笑した。いくらわたし達が世間から閑人のやうに見られてゐる文學人でも、まさか頭の禿げて行く面積を通信し合ふほどに閑ではない。けれども、わたし達の頭の禿げ加減がゴシップの種にな

るほど、それほどわたし達が一緒に年を取つて来たことだけは否むことの出来ない事實である。

片上君がロシアから歸つた勿々、ある青年がわたしの所へ来ての話の際にも、「此の間片上さんにちよつとお目に懸りましたが、ずるぶん毛が薄くなりましたよ。頭だけはもう確に立派なプロフェッサアですね。」とまるで地口みたいな事を言つて、笑ひながらわたしの頭をも意味ありげに眺めようとしたりした。

さうだ。わたし達は本當に年を取つた。頭が禿げかけて来ても不思議でないほどに年を取つた。さう思ふと片上君と知り合つてからの歲月の長かつたことも思ひ出される。片上君を初めてわたしが見たのはもう十七八年の昔になる。それはわたしが初めて早稻田の高等豫科から本科に移つた時、即ち明治三十三年の秋であつた。豫科時代にも同じ教室にゐたのであるが、當時の豫科は政治經濟部志望の者も一緒に何百人といふ人数であつたし、それにわたしは三日に一日位しか學

校に出なかつたから、其の時にはまだ識る機會がなかつた。

三十三年頃の片上君はまだ十七八歳の青年であつた。しかし背丈は高かつた。むつつりと口を結んだ所に老女のやうな表情があつて、さすがに年より長せてはゐたが、ちつと書物の上に目を据ゑて、滅多に教師の方を見上げもせねば、無論脇見などすることのない凝然とした其の姿は、確に若い敬虔な學徒であつた。教室へ入つて来る時、教室から出て行く時、片上君は其のすらりとした姿をまつすぐに小股に運んで、傍人の存在などをば全く氣もつかぬやうに目の前ばかりをまともに見てゐた。それはまるで、自分は自分だけで、一人の道を行くのだ、といふやうな超然とした感じを人々に與へた。

「なんだ片上の奴、いやに澄ましてゐるぢやないか。」と陰口を利く者などもあつた。

しかし、此の時の片上君は間もなく休學して歸郷された。従つてわたしとも深

く相識る機会がなかつた。が、越えて三十五年の春、片上君はまた早稲田の人となつた。其の年の秋であつたか、其の翌年の秋であつたか、とにかくまだ單衣を著てゐる時分、わたしは初めて片上君と連れ立つて、片上君の小日向臺町の素人下宿へ遊びに行つたことがある。交際らしい交際はそれからそろ／＼と芽ぐんで來た。

しかし本當に親しく往來するやうになつたのは、四十年の五月、わたしが神樂坂の下宿屋で火事に遭つて、著のみ著のまゝで焼け出されて、大久保に移つた頃からである。其の頃片上君は妹の順子さんと一緒に自炊生活をしてゐた。人見東明君が後に同居したことなどもあつた。

片上君に會つたものは、誰でもあの高く秀でた廣い額に威壓されるやうに覺えるであらう。あの高い額は片上君の高潔を誇示してゐる。そして其の威壓を和らげて救つてゐるものは、もしくは裏切つて高潔を引き下げてゐるものは、あの唇

邊に漂ふ老女にも似た微笑である。あの微笑は片上君に人間味を豊かに賦與してゐる身上だ。淋しい微笑だけれども、あの微笑には柔かな感情がある。それ故あの微笑を見せられずに、唯むつとしてゐる、もしくはしやんとしてゐる片上君にだけ接してゐる者は、片上君をいやに尊大ぶつた、傲慢な、若い人達ならば容易に近づき難い人とさへも思ふかも知れない。けれども、あの微笑に度々出會つた者は、却つて反對に親しみ易い、寧ろ時には愚痴つぽ過ぎると思ふ位な片上君を見出すであらう。

結婚前の片上君は恐ろしく生まじめであつた。譯もない常談をも皮肉と取つて腹を立てるほどに生まじめであつた。吉江君と水野君とわたしと片上君と四人で日光へ旅行した時にこんな話があつた。中禪寺に泊つた晩であつた。夜中に片上君がひどく魘されてゐるので、枕を突き合せて寝てゐたわたしは片上君を喚び起した。片上君は、あつと溜息をついてやつと我に返ると、恐ろしかつた夢の話

諄々と事細かに話し出した。なんでも家の前の溝川の橋の上に、山のやうに積んだ火口ほくちに火をつけて燻いぶし殺されようとしたのだつたといふやうな話であつた。それがあまりまじめで、さながら現實の事のやうに、溜息交りで話してゐたので、みんなはくすくすと笑ひ出した。

「狸と間違へられたんだらう、」と水野君が半疊を打ち込んだりした。

すると片上君はむきになつて腹を立てた。人がまじめに恐怖を話してゐるのに笑ふといふ法があるかといふやうな口調でぶりぶりし出した。その怒る馬鹿々々しさをみんなは可笑しがつてまた笑つた。たうとうしまひには片上君も仕方なしに苦笑しながら口を噤んでしまつた。

しかし、結婚してからの片上君は變つた。額がだん／＼抜け上がつて微笑の皺がだん／＼深くなるにつれて、だいぶ愛想がよくなつた。柔和な趣を備へた好個の紳士となつた。ある人はわたしに對して、片上君は可也策略もある人だと言つ

て評したが、わたしにはさうは思はれない。寧ろ正直過ぎるほど正直な男である。

其の正直な片上君と可也一本氣なわたしとは、二人だけで話してゐると、まことに仲が善いのであるが、どういふわけか、そこに第三者がはひつてゐると、互に極度に興奮して、絶交もし兼ねないほどの波瀾とキヤタストロッフとをしば／＼醸成したものである。が、此の頃はどうかであらうか。ロシアから歸つて來てからはまだ幾度も會はないから、其の邊の見當はちよつとつき兼ねる。が互ひに頭の禿げかゝつて來た此の頃は、もう目の色を變へて突き詰めた喧嘩などはしないほどに大人になつてゐるであらうか。それともまた、「馬鹿な事を言ひ給へ、」といふ片上君の口癖と、「勝手にし給へ、」といふわたしの捨てぜりふとが交錯して不穩な形勢を作り出す元氣があるであらうか。——わたしはそれを今の懸案にして、近いうちに片上君と二人で會はうと思つてゐる。

## 吉江喬松氏の印象

——一味の深刻な影が——

足掛け五年、殆ど滿四年の外遊を終つて、フランスから歸つて來た吉江君に、わたしがはじめて逢つたのは九月四日の晩、永樂俱樂部の食堂であつた。

八月の下旬、吉江君の乗つた船が、多分もう日本の領海にはひつたであらう頃には、わたしはまだ信州の富士見から澁の湯の方へ原稿紙と萬年筆とを持つての旅をしてゐたのだが、吉江君が東京驛に着く日には是非共東京にゐようと思つて、神戸へ船が着くといふ其の三十一日の前日に、倉皇として歸つて來たのだつた。ところが、なんといふ間の悪さだつたらう。東京驛に着く時間が分らなかつた

爲に、そこではわたしは逢へなかつた。翌日、芝の信濃屋に落ちついたといふ事を知つて、早速出掛けて行つて見たが、そこでも生憎出かけたあとで逢へなかつた。すると其の翌日の午後もう遅くなつて、「六ジニクラブへキテクレヨシエハセカワ」といふ電報が來た。わたしは取る物も取あへず、幾年振かで友達に逢ひに行くのだといふのに髻すら剃らずに出掛けて行つた。しかし、日本橋で打つた電報が五六時間もかゝらうといふ不便な大都會の郊外などに住んでゐる情なさには、折柄吹き降りになつた雨にびつしより濡れて、やつと駆けつけた時にはもう待ちきれずにみんなは食卓についてゐた。

その晩は、これは後で聞いたのであるが、長谷川（天溪）さんが吉江君の爲めに晚餐を共にしようといふほんの内輪の催しであつたといふことで、二人の外には『文章世界』の加能君と岡田君と、博文館の寫眞師とが來てゐただけであつた。



わがしが食堂にはひると直ぐに吉江君は食卓を離れて立つた。わたしも其のそばへ進んで行つた。二人は無言で目を見合はして握手した。わたしは何か言はうとしたが言葉が其の時浮んで來なかつた。悪くすると、涙が出て來はしないかといふやうな氣持がした。おゝ吉江君、大戦争の眞最中に潜航艇の危険を冒して學問の爲にフランスへ行つた吉江君、二年で歸る筈であつて四年も歸らなかつた吉江君、故國の妻子にさへも時には消息を寄せなかつた吉江君、あまりに歸朝がおくれた爲に、聞きたくもないやうな噂などが傳はつて、わたしにまで氣を揉ました吉江君、よもやとも思へば、またもしやとも思つて、はるかに其の心配をバリの方へ書いてやると、「僕は僕の道德觀と審美觀との許さないやうな事は一點もしてはゐませんから御安心下さい。之は僕を信じてゐて下さると思ふ君の友情をもつてしては當然信じられる事と思ひます。」と言つて來た吉江君、「君が區々たる風説などで心配せられるといふ事は僕には解りません。」と言つて來た吉江

君。「多少でも自分の學問に自信の出來ない限りは最初から石を嚙つて生活しても歸らないつもりでした。多少の自信がついて私は歸ります。」と言つて來た吉江君、——其の吉江君が今ここに無事に歸つて五年振であるのである。あゝ、よくこそ、よくこそ！ わたしはたゞ手に力を入れただけだつた。吉江君の手にも力がこもつてゐた。

やがてわたしも食卓についた。わたしはスープを啜るに間違へて小さなスプーンを使つたりした。

電報がおそく着いた事だの、わたしがまだ旅に出てゐるものと思つてゐたが、昨日信濃屋へ訪ねたといふので歸つてゐることが分つたといふ事だのを、右脇の長谷川さんと話したり話されたりしてゐる間も、わたしの目は向ひにゐる吉江君の顔から離れなかつた。吉江君もあのなつかしい光を湛へた目を凝らして、わたしの方を眺めてゐた。

吉江君の顔は頬がいくらか瘦せて、以前よりはやゝ長めに見えた。そして顔に、丁度寫眞で見るストリンドベルヒの顔にあるやうな一味の深刻さが影を落してゐた。どんなにか艱難な旅をして來たことであらうとわたしは腹の中で思つてゐた。

しばらく何かの話がみんなの間につゞいた後で、吉江君がわたしに言つた。

「君はちつとも變らないね。」

「さうでもなからう。」とわたしは其の時自分の顔が笑ひではちきれさうになるのを意識しながら言つた。「頭がだいぶ禿げかけたからね。」

「さういへば僕も禿げたよ。」

さう言つて吉江君は笑つたかと思ふと頭を前に垂れるやうにして見せた。なるほど、まん中の所がだいぶなめらかになつて光つてゐる。まはりの毛は艶々として黒かつたが。

だが、頭が禿げたといふ事がなぜわたし達の間で直ぐに笑ひを誘ふやうな興味の種類となるのであるか。年を取れば頭の禿げるのは當然の事ではないか。むしろ、次第に老いて行かうとしてゐる自分達の生に對して、少くともわたし自身にあつては、大に歎かねばならぬ筈のことではないか。……ところが、實は、これには二人に取つて暗黙の間に微笑し合ふほどの譯があつたのである。といふのは五年前、吉江君がフランスへ向つて立つて行かうとしてゐた際に、わたしは『頭が禿げる』といふ短い文章を書いて、同君との別れを記念したことがある。そしてその中で、わたし達が再び東京驛頭で出會ふであらう時に、二人の頭がどんなに禿げてゐるであらうかとわたしは想像した。其の想像が、今此處で姿を現實にしたからである。

そして其の時、同じ想像の比較の中においた片上君は、既に二年前、それは實際、氣持のよいほどすつぱりとよく禿げてロシアから歸つて來た。そして今度は

吉江君だ。其の吉江君も禿げかけてフランスから歸つて來た。と同時にまた、沈香も焚かず屁も放らずに、日本のうちで纔に蠢動をつゞけてゐたわたし自身も禿げかけて來たのである。わたし達がみんな、まだ獨身であつた若い十四五年ももつと前から、弛みなく續いて來てゐる友情を思つただけでも、どうして多少の感慨がなくして濟まう。……

其の晩わたしは、吉江君が故郷の鹽尻にひとまづ赴かうとするのを見送りかたがた、十一時半まで新宿停車場の待合室で、同君の細君と、子供と、そして妹さん達と一緒に落ち合つた吉江君と、別れてゐた間の事などぼつり／＼と話しかはしてゐた。いかにも久し振りだといふやうな氣持がしながら。

ところが、間もなく吉江君が歸京して來て、日暮里の方へ家を持つてから、一度は吉江君の家で、一度はわたしの家で、ゆつくりと逢つてしみ／＼と話してゐるうち、いつかわたしにはフランスの方へ行つてゐた吉江君の五年間が、本當に

あつたとは思はれないやうな、ずつと一緒に、何處かさう遠くない所でお互ひに往き來をしながら暮らして來たやうな氣持がして來た。吉江君のやさしい、理解に富んだなつかしさは、今も昔と少しもかはつてゐないのである。

## 中村星湖氏の印象

——苟くもしない慎重さ——

今年の秋、わたしは村松梢風君と二人で箱根宿の舊本陣に一月ばかり逗留してゐた。二人共に仕事を持つて行つたのだつたが、天気都合が悪く、雨勝ちの日ばかり續いたので、食後や、筆が澁つて書けなかつたりした時などにも、散歩に出ることも出来ず、話の種も盡きてしまふと、わたし達はよく碁盤を持ち出した。といつてもわたしは、

「われ／＼の碁は策どころかい。目籠だよ、」と同好の窪田空穂君などとも笑ひ合つてゐるくらゐな腕前だが、村松君はちよつと強い。思ふに素人仲間では腕の

いゝ方であらう。わたしよりも四子ほど強い。

其の村松君と碁盤に向ふ態度の話をした時のことであつた。

「星湖さんの態度は、ありやア大したものですなええ！」と感歎するやうな口吻で村松君が言ひ出した。

「君も打つたことがあるのかい？」とわたしが言ふと、

「いゝえ、わたしは打つたことはありませんが、いつか飯田館の窪田さんの部屋で、あなたと對局してゐるのを見たんです。」

さういふ村松君の言葉につれて、わたしも其の時の事を思ひ出した。それは一昨年の初夏の頃、窪田君が遽かに細君を亡くした後の佗しい孤獨を、暫く飯田町の旅館の一と間に落ちつけてゐた時のことであつた。偶然そこで落ち合つた星湖君とわたしとは、ほかにも幾人があつた客を相手に窪田君が應接してゐる脇の方で、久し振りの手合せをしたのであつた。

「星湖さんの態度は、あれやアどうしても段以上の人の態度ですわえ！」

村松君は續けてまたかう感歎したが、實際星湖君の碁盤に對する態度はしやんとしたものだつた。セルの袴の裾を左右にさつと捌いて坐つて、微動だにしないやうに上半身をまつすぐに立てた上で首を少し前に突き出しながら、ぢつと盤面に目を注いで、そしてむつつりとした口の先きをいくらかとんがらせたやうな感じを人に與へるくらゐに結んだ様子は、確に、一子といへども苟くもしないといふ慎重さを見せてゐた。

爾來わたしは、絶えて久しく同君と對局する機會を持たずにゐるが、しかし同君のこの態度は、恐らくは今も變らぬことであらうと思つてゐる。

そしてこの飽くまでも慎重な、一子も苟くもしないといつた風な、考へ深い同君の態度こそは、やがてまた同君の人生に對し、藝術に對する一切の態度ではないかとわたしは思つてゐる。

星湖君は決して物事を無造作にしないやうである。何事に對しても十分に責任を感じて考慮を費すやうである。よく會合の席上などで、わたしは星湖君が意見を述べる所を見るが、いよ／＼口を開くまでの同君の面上には、いつも大抵、かなり重苦しうな沈思の色が浮んでゐる。そしていよ／＼むつつりとした其の口を開く時には、いつも大抵、先づ突つばしつたやうな甲高い聲がわたし達の耳朶を打つ。思ひ込んで口を切つたといふ調子がそこに在る。が、いつか言葉がぼつり／＼と切れて、しまひには小さく消えるやうになつて行くことも珍らしくない。思ふに口を利いてゐる最中にも、同君持前の慎重さが顔を出して、絶えず熟慮を促してゐるのであらう。それをわたしはいつも羨ましく思つてゐる。わたしなどは、やゝもすれば時の機みに乗つて、激したり、興奮したりして、つい言はでもの事まで言つてしまふのだが、星湖君には殆どさういふことがないらしいからである。

しかし、碁を打つ時に考へて打つた石が必ずしもいゝ石だとばかりはいへないやうに、凝つて却つて思案に能はぬ場合は人生の上にも藝術の上にもある。星湖君の慎重さが、時とすると小さな問題にこだはり過ぎて、却つて力負けのしたやうな場合もまんざら目に著かぬことはない。とは云へ、何事に對しても眞剣な態度で向ふ事は、わたしなども及ばずながら信条としてゐるくらゐで、悪い事などは夢にも思つてゐないのだが、しかし、時と場合と對象の性質如何に依つては、あまりに尤も臭い、物々しい態度を取つてゐるのが、時に、滑稽な氣を起させる事はある。いつか片上君が指摘してゐた『徒勞』及び『幽霊』の中に出て来る淺田といふ人物などにも、多少さういつた形があつた。勿論作者たる星湖君からいへば、あの淺田の三浦の妻女に對して置かれた位置は、あゝした形に發展させる外はなかつたであらうと思ふけれども、讀者たるわたしなどから見れば、淺田があゝいふ位置に身を置いたといふその事が、既に淺田の力負けとしか思はれない。

彼れが好んで事を大きくして、其の責任感に自ら追ひまはされてゐるとしか思はれない。そして作者たる星湖君は、それをば無條件に是認してゐたらしく思はれる。……

星湖君とわたしとは、藝術觀の上ではしばしば反對の立場に立つて來た。そしてそれを星湖君は人生派、わたしは藝術派といふ風に、漠然と所屬づけることに依つていつも大抵物別れになつて來たが、しかしわたしは星湖君の素質はむしろ純然たる藝術派に屬すべき人ではないかと思つてゐる。問題文藝を提唱したり、民衆藝術を力説したり、すべてさういふ風の事は、恐らくは星湖君の内の内なる本質的の要求ではなく、むしろ知識のさせる氣紛れな業わざなのではないかと思つてゐる。わたしはやはり、星湖君は黙つて自分の世界を創造すべき人であつて、時代と共に推移したり變遷したりする理智などの誇りの下に、對社會の問題の提出や、もしくは其の解決などに携はるべき人ではないやうに思つてゐる。但し、か

ういふわたしの意味を、同君の創作そのものの中に人生味のあることを拒否する意味に（まさか取る人もなからうけれども）取るべきでないことはいふまでもな  
す。

「新潮」・大正八年十一月十五日

### 思ひ出の一つ

ちよつと三十五六年以上にもならうといふ長い間のつきあひで、お互の獨身時代には同じ家に下宿したこともあれば、お互に家をもつてからはお互の子供の生れて、育つて、大人になるのをまで見て來た間柄であるから、今、にはかに吉江君と永遠に別れたところで、何かと思ひ出をたぐりはじめて見ると、およそ果てしないことになりさうである。時たま／＼身邊いたづらに多端をきはめてゐる際でもあるし、とても巨細にわたつて書きつゞけることなどは出來ないから、ここでは端的に思ひついたことをただ一つだけ述べることにする。

前の世界大戦役の時に、爆弾下のバリに踏み止まつた吉江君は、戦争が済んでしまつても中々歸つて來ない。「もう歸る。」「今度こそは本當に歸るさうだ。」などといふ噂はしきりに立つが、當人は一向に歸つて來さうな様子もない。そのうちに、

「一たい、どうしたんだらう、吉江君は？ 何か歸れないやうな事情になつてゐて、引き止められてゐるのではないか？」

などといふ臆測から、つひには、まことしやかに同棲者があるのだといふ飛んでもないデマを飛ばしはじめる者などもあるやうになつた時である。君の歸朝を、それこそ一日千秋の思ひで待ちに待つてゐる細君が、君の故郷のはうで、幼い二人の子供を抱へながら、君の父君に事へてゐるのを僕は胸に思ひ浮べながら、バリの君のところへ手紙を書いた。なんだつてデマの飛ぶやうなことをしてゐるのかと、噂の眞偽をいささか詰つてやつたのである。

「そんなばかげた事を君までが信ずるのか」と、さも心外げにいつて來たのが、それに對する返事であつたが、……しかしここまでは當然のことで、これだけなら何でもないが、その噂の手紙の中であつたか、そのつぎのであつたか、今、捜し出すといふのだが、とにかくこの交渉のあつた其頃の手紙に、「いよいよ歸ることにきめた。歸つても大丈夫といふ自信がついたから」といふ意味のことをいつて來た。

いはゆる毀譽褒貶を度外において、四ヶ年の長い月日を可なりひどい窮乏の中に堪へ忍びながら、實に、吉江君は、この自信一つをしつかりとつかむためにバリの踏み止まつてゐたのである。

○  
歸朝後の吉江君の行藏や業績を見る時、僕はいつもこの「自信」の一語を思ひ起すのを常とした。



○  
今年の一月二十五日の夜、芝の水交社で海洋文化協會の發會式ともいふべき第一回懇談會が催された時に、吉江君の講演が終ると、食堂が開かれた。君は當夜の中心人物であつたのだから、當然、メインテーブルに席が用意されてあつて、そちらへ行かねばならなかつたのにもかかはらず、ふと僕を見つけると、例の首を少しかき上げて、目許を笑はしながら僕たちのテーブルに來た。

「だめだよ、君は。今夜は、あつちへ行きたまへ。」  
と僕がいふと、

「まあ、いゝよ。君のそばで食べよう。」  
などといつて、當夜の肝煎役である海軍省側の人々がしきりにむかうから呼んでゐるのに對しては、振返つて、手を振らんばかりの恰好で軽く會釋などしながら、たうとう僕と中村白葉君との間に腰をおろした。

中村君の右には藤澤衛彦君、そのつぎには澁澤青花君、伊達豊君、そして僕の手前まで六人で、ぐるつと圓卓を圍んだのである。

ちやうど英艦の淺間丸臨檢事件のあつた直後のことで、みんなは一しきりその問題で船長の態度を非難したり辯護したりしてゐたが、そのうちに吉江君は中村君に向つて、

「しばらく旅行しませんねえ。また、しようぢやありませんか。」  
といつた。

「えい。しませう。ぜひ、しませう。」

中村君は力をこめて答へてゐた。

といふのはちよつと説明があるかも知れない。田山(花袋)さんが在世の頃、といふと、もはや十年以上も前のことだが、片上(伸)君もまだ生きてゐた時分のことだ。旅行好きの田山さんが先達で、窪田(空穂)君、吉江君、片上君、岡

村（千秋）君、白石（實三）君、中村君、それに金星堂の福岡益雄君、僕などの仲間は、よく一泊二泊の小旅行を關東平野方面などに試みたのだが、その先達を喪つてからは、とんととだえてゐたのを想ひ起して吉江君が言ひ出したのである。

「あゝいふ旅行はいゝねえ、全くの野放しで、氣がらくで……。」

吉江君はしみじみといつて、「今夜のこの會も、自由で、オープンで、その點では、とらはれるところがなくつていゝ。」

述懐するやうにいつたのがきつかけになつて、僕はそこで、去年の暮ごろ、吉江君が會長になつたとか、なつたのではないとかいつて、かれこれと世間の噂にのぼつた海洋文藝協會との關係から、この海洋文化協會の成立するまでの事情などを、君の口から一通り聞いたのだが、その時、僕の感じたのは、ここでもやはり君の「自信」が常に強く働いてゐたことである。たしかに自信のもてない仕事には輕々しく乗出すことをしなかつた吉江君が、この海洋文化協會には、かなり

積極的に身を入れて臨んでゐたらしいのを見ると、思ふに、十分に「自信」を生かさうとしたのであつたらう。

「本當の仕事は、君、六十を越してからだねえ」とも吉江君はいつてゐた。

○

ところが、第二回の例會が二月二十二日に開かれて、その時には僕も出席して君と水交社で逢つたのだが、そのつぎの第三回の例會の時には、僕は亡兄の法要に郷里へ行つてゐて缺席した。勿論、君は出席したことと思つてゐたのに、何といふことであつたらう、僕は歸京するや否や、忽ち、君がすでに瀕死の病床にゐるのを見舞はなければならなかつたのである。悲しいかな、その時にはもう意識は不明であつた。

折角の自信を生かし得なかつたことは、さぞ君の憾みとしたところであつたらう。

## 親不知の嶮へ行く

吉江君。

君が五月一日の夜の十時に、パリで書いたあの長い手紙が、七月三日の午後一時二分の消印で僕の家に配達された。この頃はシベリア經由でも中々日数がかる、それに一々検閲すると見えて、これにもパリの軍務局で開封したといふ證印が押してあつた。そのためにも多分幾日かは後れたであらう。

その手紙を、僕は併し、翌日の正午少し前に見た。その日僕は、一週間ばかりの旅を終へて、越後の糸魚川から夜行の列車でずつと乗り通して來たのであつた。暑い七月の頃の汽車の旅は決して愉快なものではない。身體は汗に塗れ、着物は

埃に汚れてゐた。けれども家に着くや否や、僕は水も使はず、着物も着かへずに、先づ君の手紙を貪り讀んだ。

君は今度の手紙の中にも、僕と一緒に柔らかな青葉の煙るブルヴァルを歩きながら、心の趨くまゝに語つたならば、と淋しい君が心の願ひを書いてゐた。それは僕とても同感だ。けれども、今の僕には、パリの君やモスクワの片上君を訪ねることなど思ひも寄らない。到底出來ない相談である。——おゝさうく、出來ない相談といへば、序でに書いておきたいことが一つある。何も遠くにゐる君達にまで知らせずとものであるが、併し、相變らず輕率な斷案を下したがる、故國の文壇の様子を知る上には多少の足しになるかも知れないと思つて、書き添へることにする。

それは外でもない。君の友人であるところのこの僕といふ人間が、「出來ない相談」を常住腰にぶらさげてゐる、世にも珍しい不幸な人間である、といふ事に極

められてしまひさうな、それこそ思ひも寄らない出来事である。そして若し僕が黙つてゐれば、假令裁判は片手落ちでも、誰も辯護して呉れさうにもないから、判決は其のまゝ確定したものになつてしまふかも知れない。……まあ併し、そんなことはどうでもいゝではないかと、かう君達は屹度言ふであらう。僕の心の一部も現にさう言つてゐる。併し、僕は間違つた理由の下に、殊にはまた見も知らぬ他人の輕率な判断の下に、不幸な人間などにされてしまふのはいやだ。

と、かう言つたところで君にはまだ、何の事とも分らぬであらう。實はかうなんだ。……

君は有島生馬君を知つてゐるであらう。あの人の兄さんに武郎さんといふ人のあることも知つてゐるであらう。——さうだ、幾年か前の『白樺』に『ある女のグリュプス』を書いた人だ。頭がいゝといふ評判の人だ。——あの人が七月の『新潮』に『平凡人の手紙』といふ短篇を載せたのだ。それは、愛妻を亡くした後の

自分に、後妻を勧めるものがあるが、自分は今そんな問題を考へる氣がしてゐない。一年も経つたら君までが、或ひは再婚を勧めはしないかと思ふ。併し、結婚したくなつたらこつちから申出るからそれまで待つてゐて呉れ給へ、といふ意味のことを親友宛に書いたもので、星湖君などいゝ作だといつて、『時事新報』で感心してゐた。

併し、其の作品の批評を僕はしようとするのではない。僕はたゞ其の作の中で、僕「随分不幸な人」にされたことを君に告げればよいのである。そして武郎さんのいふやうな意味で、僕は必ずしも不幸な人間ではないといふことを君に頷いて貰へばよいのである。少し長いけれども、思ひきつて其處の文章を全部抜くことにしよう。その方が事が明瞭になつてよからうと思ふから。それはかうなのだ。

餘程前に時事新報で何とかいふ人がある月の文藝批評を書いてゐたが、泡

鳴と云ふ人の書く作物は、下劣な醜陋な人間ばかりが活躍してゐて、讀むのもいやになる相だ。しかし、人生の實相はこんなものではないと誰れが云ひ得ようと論者は作者に強く同感を表してゐた。而してその直ぐ後にコエベルと云ふ人の『問者に答へて』と云ふ文の批評がしてあつて、其西洋人の熱實な道義的氣魄（表現はこの通りではないのだよ。然し意味はさうだつた）には深い尊敬を拂ふと結んであつた。この頃の人は、僕のやうな十人並の頭では判らない程微妙な皮肉を弄するさうだから、或は其批評家も皮肉を云つてゐるのかも知れないけれども、また文字通りに取るとすると、その人などは随分不幸な人だと同情に堪へなかつた。下劣、醜陋が實相である人生に居て、熱實な道義的氣魄を憧憬する——出來ない相談を常住腰にぶらさげてゐなければならぬと云ふ不幸は全く同情に値する。これ程不幸な人は多分そんなに澤山はないだらうけれども。

吉江君。僕はかう讀み返して見ただけでも可也恐ろしい氣がする。誰が人生の實相は下劣、醜陋だなどと容易く言ひ得るであらう。果せる哉、『時事新報』にある月の文藝批評を書いた「何とか云ふ人」もそんなことを言つてはゐない。この「何とか云ふ人」が僕であることは、改めていふまでもなく君にはもう分つてゐるであらう。僕はそれなら何と言つてゐたか。それをも全部を其のまゝ引用しよう。曰く、――

岩野泡鳴氏の『冷たい月』（『文章世界』所載）では人間そのものを愚にしたやうな、皮肉以上の皮肉にわたしは興味を覺えました。出て来る人間は、皆なそれ〴〵に特色づけられてゐましたが、さてどれを見ても價値のありさうな者は一人もありません。少くとも友達にしてつきあへさうな者は一人もありません。薄のろでなければ馬鹿か、でなければいやな奴か。どれを見ても何といふ人達だらう、と嘆息させるやうな人達ばかりでした。併しこれが

滔々たる人間の本体でないと誰に言へませう。本當にこの作者はいつも人間の獸性を暴露する恐ろしい人であります。

かう言つた後で、僕は岩野君の作風を上司君の作風と簡單に比較した。併し、それは原被兩造に取つて、何れの利益にもならぬやうな記述であつた。それなら、「西洋人の熱實な道義的氣魄」なるものに就いてはどう書いたか。これはまた更に簡單である。――

和辻哲郎氏の……（云々）……と、フォン、コエーベル氏の『問者に答ふ』

（『思潮』所載）中に強く脈搏つてゐた高い道義の念と田山花袋氏の……（云々）

……と、これだけは自分の記憶の爲めにも書き留めておく必要があるやうに思ふ。

とかう言つただけだ。僕は何も深い尊敬を拂つた事にしても構はないけれど、文字通りは文字通りに取つた方がよい。もしあの人の財布の中には平素お金がは

ひつてゐる、とでも言つた時に、こいつは盗まうとしてゐるな、とそれがさも當然の事のやうに睨まれるとしたならば、それこそ随分恐ろしい世の中だ。うっかりは口も利かれぬ事になるであらう。

岩野君の作品のことだつてさうである。「滔々たる人間」と特に斷つて、其の「滔々たる人間の本体」がよく書かれてゐるといつたのだ。それがどうであらう。忽ち、「下劣、醜陋が實相である人生」になつてしまつたのだ。「興味を覺えました」が全く反對の「讀むのもいやになる相だ」になるのだから、「滔々たる人間の本体」が、「人生の實相」になる位は朝飯前のことかも知れない。併し、これは讀んだ人の頭の問題である。理解がどうであらうと、どう解釋しようと僕の方の構つたことではない。たゞ迷惑なのは、勝手に自分の方で變改した命題を繋ぎ合せて、僕を「随分不幸な人」に、澤山はゐさうにもないほど不幸な人にしてしまつたことだ。

併し吉江君。君は僕がさういふ意味で、必ずしも本當に不幸な人間になつてし

まつたのでないことを知つて安心して呉れるだらう。「滔々たる人間」が「嘆息させるやうな人達」であるからとて、一方で少数の人間が、流俗の徒でない少数の人間が、例へば人道主義を眞甲に振りかざしてゐるやうな人間が、高い道義の念を尊ぶのが、何で出来ない相談であらう。もしまたこれが本當に出来ない相談であつたならば、それこそ世の中は一體どうなるのだ。

それにしても、人さま／＼の世の中である。其の中のある一人の人が、勝手にさう極めようとしただけではないか。何もそんなに辯解じみた事をくどくど言はずとものことだ、と君はいふかも知れない。併し、原告の言ひ分は一つの作品の中に書いてあるのである。永久に残るべき可能性を持つてゐる。僕のは時に取つての月評だ。其の日の新聞と共に破いて棄てられる運命の下にある。後になつて見れば、明かしの立たぬ缺席裁判のやうなものでないと誰が言ひ得よう。僕は無實の罪をきるのはいやだ……

はてな。「序で」の話をしてゐるうちにだいぶ夜が更けてしまつた。かうしてはゐられないぞ。

吉江君。實は僕、君の手紙が丁度僕の家配達された時分に、親不知の嶮を見に行つてゐたことを話さうと思つたのだつた。君は僕が、始めに糸魚川から歸つて来たといつた時に、すぐに其處が相馬君の故郷であることを思ひ出したであらう。そして相馬君が其處に歸つてから、もう一年餘を過ぎた事をも思ひ出したであらう。先きにもいつたやうに、君や片上君を訪ねることは到底僕には出来ない相談であるが、併し郷里へ歸つた相馬君を訪ねる事は必ずしも出来ない相談ではない。それは滔々たる人間でない少数の人間が、高い道義の念を尊ぶ事が出来るのと同じ事だ。それで僕は可なり長い間それを思つてゐた。

所が、君も知つてゐる通り、僕は一方に職業を持つてゐた。丁度鉛筆を削り減らすやうに、その日その日を一日づつ削り減らして行く、生命そのものを徒らに

削り減らして行く職業を持つてゐた。而かも其の職業に依つて、僕の生活は保証されてゐたのである。いやでも僕はそれに囚はれてゐなければならなかつた。ところが、何といふ幸ひであつたらう。僕はこの五月の末に、其の泥沼のやうな生活からやつと足を抜き出すことが出来たのだ。長い間の願ひがかなつて、その職業から解放されたのである。

この自由を得た僕の喜びが、直ちに旅を思ふ氣持になつたのに何の不思議もないであらう。僕は身のまはりに差し迫つてゐた用事をひとまづ片附けるや否や、六月の末に旅に出た。

丁度その折柄、窪田君は細君を亡くした後の、身のおき所もないやうな佗しい氣持を抱いて暫く故郷に歸つてゐた。そして子供達と共に無邪氣な其の日其の日を送ることに僅に心を慰められてゐた。僕は先づ同君を松本平の一角に訪ねた。そして其處に、まだ雪の残つてゐる日本アルプスの連嶺を眺めながら數日を靜かに

過した。其處へ行く時、僕の乗つた汽車が君の故郷の鹽尻を通つたことはいふまでもない。僕は餘程おりて君の細君や子供達を見て行かうかと思つたが、夜の十時で遅かつたし、富士見から同行の青年達もあつたりした。折角あすこまで行きながら、逢はずに通つてしまつたことをいまだに残念に思つてゐる。……

糸魚川へは窪田君と一緒に رفتた。それは七月の二日であつた。一茶の故郷の柏原から田口のあたりを汽車の通る時、飯綱、黒姫、妙高三山の威風あたりを拂ふ優り劣りのない雄姿には、山國に生れて富士を見、八ヶ岳を見ながら育つた僕も、さすがに讚嘆の聲を放たずにはゐられなかつた。

久し振りで逢つた相馬君は、病氣をした後だといふことだつたが、いかにも健康さうな色をして、落ちついた、平和な心持を見せてゐた。大愚良寛の研究に同君は今没頭してゐる。良寛は本當の意味の沙門であつた。本當の意味の歌人であつた。其の住んでゐた北越地方の人々に、良寛くらゐ深い人格的感化を及ぼした



人はないといふことである。故郷に歸つた相馬君が、この人の遺跡を尋ねるといふことに僕は大きな意味を持たせずにはゐられない。

親不知へは三日の午後に行つた。梅雨の晴れあがる時分によくあるやうな、あの氣狂ひ雨が時々ばらばらとやつて來た。僕等三人の外に宿屋の若主人の加はつた一行は、親不知驛から更に案内者を備つて、一里の道を名高い難所へと歩いて行つた。左手に見上げる削り落したやうな斷崖には、所々に山百合の花が美しく咲いてゐた。

そして其の中途に在つた外浪とらなみといふ忘れられたやうな漁村。——その漁村の生活の有様くらゐ僕の心を動かしたものは曾てなかつた。

——併しながら僕は今、それさへ書いてゐることが出來ない。紙がなくなつてしまつたのだ。仕方がない。親不知の難所へはこの次ぎの手紙で行くことにしよう。では失敬。

—『文章世界』・大正六年七月十三日—

### 有島武郎氏と氏の如き態度にある作家に

若し何か言はれるならば、多分こんなことを言ふだらうと思つてゐた通りのこと、有島武郎氏は其の『平凡人の言禍』の中で言つてゐられた。それは外でもない。氏が『平凡人の手紙』の中で書いたことは、作者なる氏の考へではなくて、氏の削り上げた一人物、即ち「平凡人」の考へである。だから、その考へが、假令人にどんな迷惑をかけようとも、それに對して作者はどうもしやうがない。……と明瞭には書いてないが、さう取つても多分有島氏は不服は言はなからうと思はれるやうに書いてあつた。なぜなら直ぐ其の後で、「と云つて、私はあの言葉に對して責任がないと云ふのではない。あの言葉があつた作に現はされた平凡人の

性格を活かす言葉であるか殺す言葉であるかと云ふ事については何處までも責任を負ふつもりです。」と殊更に斷つて、作者が責任を持つ範圍を明瞭に制限したからである。

しかし、それはいかにも尤もなことである。昔からさういふ風なことを言つた作家は澤山あつた。現にわたしが十幾年か前に翻譯したイブセンの書翰の中にも、「彼等（スカンヂネビヤの批評家）は小生をして、小生の作れる劇中のある人物の述ぶる意見に對し、責任を負はしめんと誣ひ居り候。しかれども、實際は其の全篇中にも、作者の意見も話説も全く無之候。否、小生は實にそれを避けんとして、常に大いに苦心致し居り候。」といふ一節があつた。今の日本の作家の中にも、同じ考へを持つた人は澤山ある。思ふに、將來の作家の中にも必ず有るに違ひない。されば、有島氏がさう言はれたところで少しも不思議はない、と誰しも思はなければならぬことのやうに思はれる。

けれども、それには其作家の態度が、かの迫眞をモットオとする自然主義者のやうに、——イブセンが同じ書翰の中で、「實に小生の目的は、唯だ讀者の腦裏に、彼が人生の事實を目睹しつゝありといふ印象を生ぜしむることに有之候。」と言つたやうに、全く人生の事實の再現を目的とする純客觀的であることを豫想しなければならぬ。知らず、有島氏は、氏の態度がさういふ作家達の態度と同じであることを、果して快く承認するつもりであらうか。

寧ろわたしの見る所に依れば、近來の氏の作品に、少くともあの『平凡人の手紙』に現はれた作者の態度は、却つて其の反對のやうに思はれる。氏は作中のある一人の人物の言葉や行爲に、あの『平凡人の手紙』に於いては、主人公なる平凡人の言葉や行爲に、作者自身の感想を、意見を、精神を、現はしてゐるやうに思はれる。これは明かにイブセンなどとは反對な態度である。また、氏の數次の口吻から考へて見ても、これは反對な態度であると見た方が正當であり、自然で

あるやうに思はれる。

尤も、有島氏といふ人は、(かういふことをいふのはお互ひに好ましいことではないが、賣り言葉に買ひ言葉で、黙つてばかりもゐられぬ場合もあるからいふのだが、) やゝもすれば、平氣で前言を變改されることがあるから、——例へば、『平凡人の手紙』の中では、「而してその直ぐ後にユエベルと云ふ人の『問者に答へて』と云ふ文の批評がしてあつて、其の西洋人の熱實な道義的氣魄(表現はこの通りではないのだよ、然し意味はさうだつた)には深い尊敬を拂ふと結んであつた。」といつて、括弧内の言葉は明かに熱實な道義的氣魄といふ言葉の註に書き加へておき乍ら、『平凡人』の言禍』では、わたしが岩野泡鳴氏の小説に對して加へた批評を言葉通りに覺えてゐなかつたから、さう斷つておいたのだと言つてゐるやうに、全く文脈を無視してさへ、平氣で前言を變改されることがあるから、さあといふ場合になれば、またどんな風な詭辯を弄するかも知らないが、誰が見て

も明かに作者の感想に肉をつけた作品であると思はれる『平凡人の手紙』の主人公なる「平凡人」と作者自身との間に、人間としての有機的關係がないと何處までも主張されるかどうか。これは一應聞いておきたいものである。そしてまた、其の間に有機的關係のあることを全く否まないといふならば、その場合に於いて、なほ且つ氏は其の主人公の考へ方や言葉に對して、人に迷惑をかけた言葉や考へ方に對して、何の責任をも感じずにおられるかどうか。感じずにおいて、それで氏は作者としての、人間としての卑劣をも、卑怯をも、罪惡をも感じずにおられるかどうか。これも一應聞いておきたいものである。

かう言つたならば、有島氏は或ひはかういはれるかも知れない。だから、「あの言葉に對して責任がないと云ふのではない」と言つてゐるではないかと。なるほど、それはさうもいはれてゐる。けれども、それは前にも述べたやうに、技巧上の責任であることを氏自身が明瞭に斷つてゐる。即ち、あの言葉が、あの平凡人

の性格を生かす言葉であるか殺す言葉であるかといふことに就いては責任を負ふつもりだといつてゐるのである。けれども、それは作品の出来栄えの上の問題である。作中の主要な人物の性格に破綻があれば責任を負ふつもりだといふのである。しかし、そんなことは、實は問題にするまでもないことだ。作中の主要な人物の性格に、『平凡人の手紙』の場合に於いては唯一の人物の性格に、作者が責任を負はねばならぬほどの破綻があつた日にはそれこそ事だ。其の作品はまるで成つてゐないものになるであらう。

けれども、わたしは初めから其の作品の値打を穿鑿しようとはしてゐない。ただ其の作品の中でわたしに向つて與へられた侮蔑的同情を御免を蒙つてしまへばそれでいゝのである。だからわたしは、見も知らぬ有島武郎氏が、勝手にわたしを「随分不幸な人」にしようとした時にも、殊更に有島氏に向つては何の抗議をも申出さうとはしなかつた。たゞわたしは自分の親友に向つて、世間には随分お

せつかいな人があつて、頼みもせぬのに同情の押賣りをしたがつてゐるけれど、わたしはその人のいふやうな意味で、必ずしも不幸な人間ではないといふことを知つて貰ひたいといつただけである。言葉を換へていへば、わたしは友人に向つて、自分の無實の罪をひそかに承認して貰つてそれで満足しようとしてゐたのである。

ところが、本當に思ひがけなかつた事には、有島武郎氏の「平凡人」は、盗人猛々しいといつた調子で、どうでもわたしを不幸な人にしてしまはうといきまいて來た。そして「自分の不幸を故意に否定するのはまだしも、その不幸に氣が付かないでゐるのはその人の持つ不幸を二乗するものだ」と猶更同情するだらう」などと作者の有島氏をして空嘯かしてゐる。それはほんとにさうであらう、もしわたしの場合が有島氏のいふ通りであつたならば。けれども、わたしは有島氏の「平凡人」が、勝手に自分の方で改變した命題を繋ぎ合せて、人に迷惑を及ぼすやうな

結論に達してゐるといふ事を明かに指摘しておいた。然るに、それについては鹿を馬と言ひくるめるやうな言ひ方をして置いて、そして依然として人に不幸を押し付けようとするのだから驚かされる。さうして見ると、この「平凡人」は、口では「平凡人」と言つてゐるが、根は中々な悪黨かも知れない。道義的氣魄を難有がるやうな殊勝なことを口にしてゐるこの「平凡人」も、その本體まではいつて見れば、やはり堪らぬほどのいやな奴かも知れないのだ。いや、それどころではない、常人が事を分けて、これ／＼だから不幸ではないと言つてゐるのに、どうでも不幸な人にしてしまはうとする所などは、寧ろ悪魔らしい所さへある。

所が、有島氏は曩にも言つたやうに、作中の人物の考へに對しては、其の性格を生かすか殺すかの外は直接の責任は負はないやうに言つてゐた。よし、假りに一步を譲るとしよう。そして既に創られた人物の言葉や行爲に對しては、作家は直接の責任を負はなくともよいとしよう。そこで、事實はどうなるか。氏は氏の

創り上げた人間が、よしんばいかに理不盡な事を言つたり爲たりして、人に迷惑をかけようとも、さういふ人物を創り上げたといふことに對して責任を負はないつもりであるか。もし責任を負はないといふならば、それでゐて、氏の道義心は少しの矛盾をも、苦痛をも、罪惡をも感じずにゐられるのであるか。更に今一步を進めてこれを一般的に言へば、作家はいかなる人物を創り上げて、それにいかなる不條理な、いかなる危険な、言葉なり行爲なりを自由に言はせ、勝手に行はせても、作家はそれに對して全く何等の責任をも感じずにゐられるかどうか。

わたしは有島氏の『「平凡人」の言禍』を讀んだ時に、氏の態度に就て先づこれだけの事を明かにしておきたいと思つた。苟くも道義を口にする文學者が、さういふ態度で物を書くといふのは卑怯だと思つたからである。それに有島氏は、——氏の言葉に従へば、有島氏の創り上げた「平凡人」は、随分輕率なことをする人である。他の人を「随分不幸な人」に、「澤山はゐさうにもないほど不幸な人」

にしてしまふほどの、その人に取つては可也重大な事を決めてしまふ場合に、驚くではないか、其の人の言つた事を言葉通りに覚えてゐなかつたから、うろ覚えの記憶を以て多分かうであつたらうと思ふ記憶を以て推論の本としたといふのである。毫釐の失差ふに千里を以てすである。既に前提に誤りがあるのだから結論が飛んでもないことになるのは當然である。

しかるに、なほ驚くべきことは、其の誤つた結論を支持する爲めに、強辯の上にも強辯を重ねて、どうでも人を不幸にしようとする其の恐ろしい心持である。

氏は、「滔々たる人間といへば、古今東西に亘つて見亘す限りの人間と考へて少しも差支ないと思ひますがどうですか。」などと言つてゐる。ちつとも差支ないことはない。大間違ひのまん中である。「滔々たる者、天下皆な是れ也」と最初に言つた桀溺だつて、「古今東西に亘つて見渡す限りの人間」などを指して言つたのではないことは明かだ。況んや、わたしは既にわたしの使つた言葉を「流俗の徒」とい

ふ意味だと明瞭に斷つてある。しかるにも拘らず、なほ執拗にも自分の都合のよいやうに解釋しようとしてゐる。強辯でなくて何であらう。

氏はまた「滔々たる人間の本体」と「人生の實相」との間に相違があるとわたしと言つたのをさも怪しからんことのやうに言つてゐる。誠に驚くの外はない。病氣の本体が微菌であるといつた場合に、「では病氣と微菌とは同じものですね」と言つたら大抵のお医者さんは驚くだらう、とわたしは思ふが、有島氏はさうは思はないのか。有島氏は微菌の蕃殖を計る人達をば病氣の流行を計る人達と同じに見てゐるのか。

かういつたらまたかういふかも知れない。「馬鹿を言へ。病氣の實相は微菌ではないか」と。併し、さうなればまた「實相」といふ言葉の意義からして始めなければならぬ。けれども、わたしはかう思つてゐる。病氣といふものは苦しいものだ。熱が出たり、呼吸が苦しかつたり、頭痛がしたり、食物が食べられなかつ

たり、兎に角いろ／＼さま／＼の事があつて、要するに苦しいものだ。わたしは病氣は微菌であるといつて、もし澄ましておられる人があつたら、それはよつぽどえらい人か、とんちんかんなお目出度い人かであると思ふ。

人の性は善なりといつた人もある。人の性は悪なりと言つた人もある。けれども、人生の實相は、それが爲に天國になりもしなければ地獄になりもしない。本體を百萬積み重ねたところで人生の出来ないことは、丁度微菌を幾ら培養しても病氣にならぬと同じ事である。

有島氏はまた、否、有島氏の「平凡人」はまた、「滔々たる人間は薄のろでなければ馬鹿か、でなければ友人にしてつきあへさうな者は一人もないとは思ひもよらない事」だから、わたしとは思想的に連絡の絲を絶たれてゐると言つてゐる。併し、いつ何處でわたしが「平凡人」の思ひもよらないやうな事をいつてゐるか。ここでも「平凡人」は輕率な斷定をしてゐる。

わたしが岩野君の『冷たい月』の中の人物を、「薄のろでなければ馬鹿か、でなければいやな奴か」といつたのは事實である。けれども「これが滔々たる人間の本體でないと誰に言へませう」といつた「これ」は直ぐ其の前の「どれを見ても何といふ人達だらうと、嘆息させるやうな人達ばかりでした」といふ「嘆息させるやうな」といふ事を指してゐるのである。(これは文法上、當然さうなつてゐるのである。)そしてそれがさうである事は、其の後に來てゐる「本當にこの作者はいつも人間の獸性を暴露する恐ろしい人であります」といふ文脈の上から見ても明かな筈である。しかるに有島氏の「平凡人」は、勝手に文章の文句を顛倒して、自分に都合のよい命題を作つてゐる。それを故意にさうしたのだとしては餘りに穿鑿に過ぎた沙汰でもあるし、また「平凡人」の品性を傷けることにもならう。わたしは矢張り「平凡人」の輕率に歸しておきたいと思ふ。

併し、かう言つたならば、「嘆息させるやうな」といふのは、「薄のろでなけ

れば馬鹿か、でなければいやな奴か」を指して言つたのであるから、其の「嘆息させるやうな人達」を指した「これ」は、取りも直さず、「薄のろでなければ馬鹿か、でなければいやな奴か」ではないかといふかも知れない。けれども、わたしは猫は動物であるから、動物はみんな猫であるといふやうな、餘りにも誤謬の明かな推論に對しては、平にお相手を御免蒙る外はない。

といつたら、またかういふかも知れない。それにしても、「嘆息させるやうなもの」が、「滔々たる人間の本體」であるといふのは、「平凡人」に取つては恐ろしい事だと。而して、實は此處に、この一點に、「平凡人」とわたしとの人間に對し、人生に對する考への根本の相違が横はつてゐるのであらう。有島氏の「平凡人」は大多數の人間を親切ないゝ人だと思つてゐるといふことだ。誠に結構な事である。滔々たる人間の本體に、暗い、嘆息をさせるやうな、時には恐ろしい、憎むべき、戦慄させるやうな素質が全くないと信じてゐられるほどに、この世の中

の外見を觀たままで満足してゐられれば、誠に、誠に其の人は幸福であらう。「平凡人」は幸福であるに違ひない。

けれども人間の心理はもつと複雑だ。外に現はれたばかりが其の全部ではない。外面如菩薩、内心如夜叉といふ言葉があるが、これは何も女にばかりは限らない。滔々たる人間を少しでも深く解剖すれば、其の大部分がさうだといはなくてはならないかも知れないのだ。

有島氏はまた人間に嘆息させるやうな素質があれば、高い道義の念とは氷炭相容れないかの如くに言つてゐる。常談ではない。事實は其の逆である。さういふ暗い一點があればこそ、道義の光も照らす必要があらうといふものだ。光と闇とは物の兩面だ。善と惡とは事の表裏である。この二つのものは全く相異つてゐるやうで、實は同一物である。「平凡人」といふ人は、こんな幼稚な事も分らずに、作者の有島氏に辯護の勞を執らせるほどの没分曉漢であつたのか。



有島氏はまた、わたしが岩野氏の小説を讀んで、「人間そのものを愚にしたやうな、皮肉以上の皮肉に興味を覺えました」と言つたのを、さも以ての外の事のやうにいきまいて、「滔々たる人間の眞暗な本體の露骨な描寫に興味を以て讀む——前田氏が堅く主張せられるこの事實は、謙虚な心で訂正されるにあらずんば、取消すことはもう出來ない」などと言つてゐる。妙な所に力瘤を入れたものではないか。わたしが興味を持つた意味と、氏がわたしが興味を持つたといふ意味と、全く同じであるかどうかは姑く措いて、兎に角わたしは、自分が岩野君のあの作に興味を覺えたといふ事實だけは訂正もしなければ取消もしない。有島氏は、其の點については十分に安心なさるがよい。

所で、なぜ興味を持つて讀んでは悪いのか。氏は興味を持つたといふ事を、中に描かれた人生の是認といふ意味に取つたのかも知れない。それだと随分滑稽だ。わたしは『十字架上の基督』に興味を以て見る。併し、わたしは基督を殺した人

達の行爲を是認しようとは思はない。わたしは『ジョオコンダ』のあの微笑に興味を以て見る。併し、わたしは同時に婦人の貞操を尊重することに於いて少しも矛盾を感じない。わたしは『ハムレット』をも、『マクベス』をも、『リヤ王』をも、『オセロー』をも興味を以て見るであらう。併し、これらの諸篇に描かれてゐる生活そのものを讚美し、憧憬してゐるのではないのである。藝術品に對する「興味」といふ言葉を有島氏は一體どう解釋してゐるのか。

要するに、世の中には美しいこともあれば醜いこともある。善いこともあれば、悪いこともある。正しいこともあれば正しくないこともある。理想主義者は主として正に赴き、善に赴き、美に赴くであらう。併し乍ら、寫實主義者は其の一切を無差別に客觀的存在として描寫するであらう。其の時批評家はそれらの作品に對して、なぜ、どちらか一方に偏した立場にゐなければならぬのか。わたしには其の理由が分らない。いや、分らないといふよりは、わたしはそんな理由に頓着

するよりもつと緊張した心持で、善、悪、美、醜、正、不正、一切の描寫に對さうとする興味の方が強い。

もし、事を分けてかうまで言つても、「それがいけないのだ」といはれるならば、「へえ、さうですか」とわたしはお答へするより外に何と言ひやうもないであらう。

—『讀賣新聞』・大正六年八月二十日—

## 批評家の尺度

- A。君は批評家かい。
- B。なぜ。妙なことを訊くね。
- A。だつて、君が批評家として人から物を言はれてゐるのを新聞で見たからさ。
- B。さうかい。さう言へば、人からさういはれたことはこれまでもたび／＼あつたよ。しかし、君は人から悪黨だといはれば自分でも悪黨だと思ふかい。
- A。常談いつては困る。僕は何も悪黨だといはれるやうなことはしてゐないよ。
- B。さうかい。それだと僕は、批評家といはれるやうなことをしてゐるといふのだね。

A。してゐるではないか。時々人の作物について彼はいふではないか。

B。なるほど。それはいふこともある。しかし、人の作物を批評したからとて必ずしも批評家ではあるまい。

A。どうして。

B。だつてその人が作をもする人だと、それは「作家の批評」といつて、「批評家の批評」とはいはないからね。

A。それでは、批評家には何か特別の資格でもあるのかい。

B。さあ。そいつは僕のはうで訊きたいくらいなものだ。

A。いや。僕も知らないから訊いてゐるのだがね。なんでもその新聞には、「批評家は正確なただ一つの尺度の持主でなければならぬ。」と書いてあつたよ。

B。へえ。それは大變結構なことだね、できることなら。しかし、正確な尺度といふのは何によつてきめるのだね。正確と不正確とをわかつ標準はどこにある

のだね。度量衡検査所とでもいふやうなところが文壇や思想界に、乃至はまた人生にあるのかね。

A。そのところは何かとも書いてなかつたよ。だが、さういへればさうだね。その標準がちゃんときまつてさへゐれば、別に面倒な問題なども起らないで、思想界や文壇も、そして人生も、さぞ泰平でいゝだらうね。もし不正確な奴があれば、例のそれ、このごろ世間ではやる檢舉とやらをどし／＼やればよいのだからね。

B。さうともさ。だが、それについて何かとも書いてなかつたのなら、それも仕方がないさ。多分、誰にだつて書けやうはなからうからね。……ところで、僕は一體どういふ尺度の持主だといつてゐるのかい。

A。ところが、そのところはよほど頭のいゝ人でなければ要領を得られないやうに、頗る曖昧に書いてあつたからよくはわからぬがね、とにかく君は正確な

尺度を持つてゐないらしいのだよ。

B。さうかい。をかしいねえ。それだと僕ははじめから批評家ではないではないか。持つてゐなければならぬものを持つてゐないのだから。

A。それはさうなるわけだが、さうはならないのだよ。この場合の「なければならぬ」は "Ought to be" だからね。いや、そればかりではない、君はなんでも、使ひなれない他人の尺度を使つたこともあるらしいよ。

B。へえ。それだと僕は尺度の盗用をしたのだね。怪しからん話だね。そして誰の尺度を使つたといふのだい。

A。それは知らない。その邊のところは頗る要領を得ないやうに書いてあつたら。けれども、君の尺度とは全然違つた尺度のやうには書いてあつたよ。さういふ覚えはないのかい。

B。ないね。いや、ないといふよりも、僕には全體その尺度といふやつがよくわ

からないよ。

A。どうして。それでびしとくと作物の寸法を計つて、腹のすききるだけのこと  
をいふのではないのか。さうしたら君、溜飲もさがるだらう。さういふ風にそ  
の人も書いてゐたよ。

B。さうかい。いゝねえ、君らは、單純な物の考へ方で満足ができて。なんだか  
君のやうにいふと、批評するのは溜飲をさげるためのやうだね。

A。だつて、さうではないのかい。

B。馬鹿を言つては困る。もし溜飲をさげるだけで済むことなら、始めからそんな胃のために悪いやうなものは讀まなければよいではないか。さうすれば溜飲も起らぬわけだからね。一たい君、尺度といふやうなもので作物の値打を計る人間があるなどと、どうすれば簡單に考へられるだらうね。……もしや君、その人は所謂人道主義者といふ連中の一人ではないのかい。

A。さうかも知れないよ。なんでも道義的氣魄に尊敬を拂ふといふことを難有がつてゐるやうだから。

B。さうだらう。それでわかつた。なんでもあの連中はね、道義といふものを大變大事にしてゐるさうだ。そしてそれに照らし合せて人生を計算するさうだ。それと同じ筆法で、僕なども自分の肉體の外に、自分の靈魂の外に、自分の生活の外に、一つのきまつた尺度を持つてゐべきであると思つたのだらう。だが、それは生憎だつたね。僕はいつも自分の全部で物を言つてゐるのだから、特に尺度といふやうなものを持ち合せてはゐないのだよ。従つて、僕の全部がどういふか一つの型にはまつてゐなければならぬといふ理窟を、僕自身が承認しないかぎりには、いつでもきまつた一つの尺度で物を計らなければならぬといふ理窟をも僕は承認しないよ。

A。それだから君は、一方で醜惡な世相の描寫に興味をもちながら、他方で道義

的氣魄を憧憬するやうな、矛盾した二重生活をしようとしてゐる不幸な人間だといはれるのだよ。

B。さうかい。さういふことが本當に矛盾してゐるのかね。だと、一方で、太一の光秀に扮する幸四郎の藝に興味をもちながら、他方で、歴史の上の光秀の謀叛を非難してはいけないといふと同じ事だらう。謀叛人に扮する役者の藝に興味をもつといふことは、謀叛を讚美することとは違ふと僕は思つてゐるがね。

A。さあ。さうもいへるだらうが、しかし、單純に考へると、どこかに徹底を缺いてゐるやうなところもあるね。第一、謀叛人に扮する者の藝に興味をもつといふことがいけないよ。

B。さうかい。いけないのかい。本當に君、いけないのかい。しかし君、僕は本當に興味をもつてゐるのだから、いけないといはれたつて困るなあ。

## 文壇生活の第一印象

文壇生活の第一印象！ いゝ題だ。イムプレッションイヴないゝ題だ。さう思つて、さて自分の文壇生活の第一印象を考へて見る。と、これはまたどうしたことだ。頗る茫漠としてゐて捕捉することが出来ない。一體文壇生活といふのはどういふ生活のことであらう、といふやうな事まで考へられて来る。

一般には、其の人の書いた原稿が金になつて、世間から所謂文士を以て目されるやうになつた人達の生活が即ち文壇生活だといふ風に解されてゐる。なるほど、これが一番穩當な解釋らしい。しかし、事實に於いては、其の人の書いた原稿が必ずしも金にならなくとも、立派に文士を以て目されるやうな人があるはしない

か。例へば、専ら自費出版で單行本を公けにしたり、もしくは同人雑誌に力作を發表したりして、それで立派に文壇に地歩を占めてゐるやうな人があるはしないか。（同人雑誌が賣れたり、單行本が賣れたりするのと、原稿そのものが市價を持つてゐるのは、同一視することの出来ない場合がある。）また、其の人の原稿が極めて確實に金になつて、そして其の金で生活を支持しながら、自分ではあつばれ文士を以て任じてゐても、世間でそれを認めないやうな場合があるはしないか。或ひはまた、金にもなり、世間でも認めてゐるのに、自分は文士と稱されるのを屑しとしないやうな人も、曾てはあつたが、今もなほありはしないか。

かういふ風にいろんな事を考へて来ると、どういふ原稿を書いて、どういふ世間に認められたのが本當の文士なのか、だいぶ曖昧になつて来る。文壇生活といふのは、必ずしも原稿料で衣食しないでも、所謂文壇といふ所に顔を出してさへゐればそれでいゝやうにも考へられる。

しかし、そんな事を言つてゐては果しがない。わたしは今何とかして自分の文壇生活の第一印象を語ることの出来るやうな方向へ自分の考へを持つて行かなければならない羽目に立つてゐる。……

一體わたしは、いつから文壇生活を始めたらう？

わたしは學校を出ると直ぐに雑誌記者になつた。その雑誌は政治經濟文藝社會の各方面に涉つた所謂綜合雑誌で、今なら大いに發展すべき可能性を持つたものだつたが、其の頃の時勢には合はなかつた。多分、早過ぎたのであつたらう。間もなく實業雑誌に化してしまつた。尤も其の時には、わたしはもう一つの、同じ書肆から出すことになつた青年文學雑誌の方にも關係して、一人の先輩でもあり友人でもある人と共に、二つの雑誌を二人で編輯してゐた。しかし、このわたしの記者時代には、わたしは文壇とは何の交渉をも持たなかつた。いや寧ろ、まだ文壇といふものすらが、明かな存在とならなかつた時代であつたといふ方が適當

であるかも知れない。田山花袋氏が紀行文家として知られ、島崎藤村氏が小諸で教鞭を執つてゐる頃である。

勿論、小説家、詩人、歌人、俳人、評論家といふものはあつた。赤門派、早稲田派、根岸派、千駄木派といふやうなものもあつた。しかし文壇といふものが今日のやうに儼然として存在してはゐなかつたやうに思はれる。わたし達は漫然とただ書物の批評をしたり、人物月旦を書いたりしてゐた。……

わたしが雑誌記者らしい雑誌記者になつたのは明治三十九年の春、『文章世界』が創刊されるに當つて、田山花袋氏の下に其の編輯に携はる事になつてからである。しかし、この雑誌も初めは文學雑誌ではなかつた。むしろ反文學の文章雑誌であつた。その仔細は創刊號にも趣旨として書いてあつたと覺えてゐるが、當時一般の青年が、美文とか、小説とかいふ風のもの巧みに書くが、實用文となると手紙一本すら満足に書くことが出来ないといふ實際の状態を歎くといふ意味の下

に、主として實用文を、満足に、完全に、機敏に書きこなせるやうな知識を與へようといふのがこの雑誌のそもそもの抱負であつた。しかしこの抱負が、創造衝動に依つて生きようとしてゐる青年讀者の心理といかに悖つたものであつたか。必ずしもわたし達が、この根本の矛盾に氣づいて意識的に態度を變へた譯でもなかつたらうが、……文章の研究が文學そのものの方へ進んで行くのが自然の順序であつたからか、それとも主筆が文學者の田山氏であつたからか、兎に角雑誌は自然と調子が變つて、いつか純然たる文學雜誌となつて行つた。従つて記者としてのわたしも次第に文壇の人達と交渉する機會が多く、時の青年文學者の多くとも親しい交遊關係を結ぶやうになつた。殊に其の頃は自然派の勃興時代で、田山氏は『太陽』の長谷川天溪氏、『早稻田文學』の島村抱月氏などと共に、其の派の急先鋒でもあり中堅でもあつた關係から、田山氏の下に働いてゐたわたしなども、自然とその洗禮を早く受けた。

それに文壇の交遊團體としては、龍土會が最も盛んな頃で、毎月一回麻布の龍土軒に開かれた例會には、國木田獨歩、川上眉山、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉、柳田國男、蒲原有明、岩野泡鳴、戸川秋骨、生田葵山の諸氏をはじめ、當時の鐵中錚々たる人々が集つた。晚餐を共にするだけの會であつたが、酒間常に談論風發といふ趣があつて、世間からは新興文藝の策源地でもあるやうに噂されてゐた。わたしが勧められて其の會へ入つた頃には、島崎藤村、正宗白鳥、中澤臨川、小山内薫、長谷川天溪、徳田秋江、吉江孤雁、武林無想庵、高安月郊、鈴木鼓村の諸氏なども出掛けて來た。勿論、每會さういふ人達がすべて集るといふ譯ではなかつたが、多い時には二十五人から三十人も集まつた。わたしは田山、長谷川の兩氏と共に博文館の方からよく其處へ出掛けて行つた。

されば、わたしの文壇生活は其の頃から始まつたといへばいへるかも知れない。しかし、これはまだ雜誌記者としての文壇生活で、即ち所謂文壇に顔を出してゐ



るといふ意味での文壇生活で、認められた文士となつての文壇生活ではなかつた。勿論其の頃といへども、わたしも原稿は書いてゐた。しかし、これも主としては雑誌記者として書かなければならない義務のやうになつてゐた種類の原稿を書いてゐたので、自分を生かす爲めの創作とか評論とかにはまだ本氣に身を入れてはゐなかつた。

が一つ、かういふことがある。確か明治四十一年の夏頃であつたかと覚えてゐるが、『趣味』といふ雑誌で、早稻田號といふ増大號を出した。自然派の主張が殆ど天下を風靡した時分の事で、何でも自分の経験を其のまゝに書きさへすればそれが即ち小説だといふ風に見做された所から、新作家が殆ど無數に輩出した時代である。早稻田からは殊にさういふ人達が多く出た。この人達の顔をならべたなら、あつと世間を驚かすに足るかも知れない、と其處に目を著けて計畫されたのが即ち、『趣味』の早稻田號である。其の時どういふ風の吹きまはしであつた

か、まだ小説らしいものも書いたことのないわたしにも何か書けと言つて來た。枯木も山の賑ひといふことがある。では一つ書いて見ようか、といふくらゐな誠に申譯のないほど輕率な心持でそれを引受けた。

しかし、いざ書かうとなると、さう簡單には行かない。いよく創作をするのだといふ本氣な覺悟の下には自然と藝術的良心も目覺めて來ずには居ない。そこで先づ取材が問題になる。其の題材の生かし方がまた問題になる。表現の形式はどうするか。其の工夫までが問題になつて來る。かくしてさんぐな苦心の末に、それでも兎に角一篇の短篇を書き上げた。『叔母の家』といふのがそれである。かつては自分の家同様に振舞つてゐた叔母の家も、從兄が妻を迎へて子供などが生れて來ると、いつか時代が變つてしまつて、また昔のやうな懐しさを寄せることが出來ない、といふやうな所を捉へたつもりで作であつたが、後で見ると、淺ましいほどにも當時の自然派の影響を受けて、ひどく皮肉な目で其の一家の人々を作

者は眺めてゐた。これがまあわたしの處女作といへば處女作だ。

この作は、それでも多少世評に上つたりして、處女作としては幸福に見舞はれた方であつたかも知れないが、しかし、わたし自身はいたく自信を失くしてしまつた。わたしは其の頃、一方でフランスの作家やロシアの作家の物を頻りに耽讀してゐた。そしてモウパッサンやチエーホフの物などを幾つか翻譯もしたりしてゐた。さういふ作品に比べてわたしの作に何處にすぐれた取柄があるか。其の題材は兎に角、其の觀方に於いて、其の表現の仕方に於いて、殊に其の藝術味に於いて、全くゼロではないか。さう思つたわたしの心がわたしに長く再び創作の筆を執らせなかつた。わたしは爾來専ら翻譯の筆に親しんだ。そしてかなり多くの人の作品を翻譯して文壇に提供した。しかし文壇には、やはり雑誌記者として顔を出してゐる方が主であつた。

かう考へて來ると、わたしが眞に文士生活を始めたのは、大正二年の春、七年

間の長い勤めを辭して、浪々の身となつた時からであるといふべきかも知れない。しかし、わたしは其の頃ゴンクウルの『陥穽』に引つかゝつて、其の翻譯のために心身共に疲弊し盡してゐた。

「英國人さへ翻譯しない作家に、手を着けるのは無謀だ。」

友人にさへかう言はれながら、わたしはそれでも其の翻譯を捨てなかつた。そして前後六ヶ年の日子を費して僅か六百枚の物をやつと譯了した大正五年の春には、可なり多額の借金さへ背負つてゐた。でも其の時になつて、始めてわたしにも文壇生活の度胸がついた。

其の意味に於いて、わたしは苦しめられたゴンクウルに感謝してゐる。なぜなら、わたしの文壇生活は其の時から本當に始まつたやうに思はれるから。

## 本然の姿を見失ふ

「下剽も三年といふことがある。文壇に出てから十年、この十年の辛抱を石の上に寝てもしとほすといふ覺悟がなければ、とても一人前にはなれない。」

かういふ言葉をわたし達は、いくたび早稻田の講堂で最も尊敬してゐたT老博士から聞かされたか知れなかつた。そして其の度び毎に、わたしは燃え立つやうな一種の幸福な興奮を感じながら、必ず其の辛抱をしとほさうとひそかに心に誓つてゐた。

しかし多くの同級生は、——父祖傳來の特別な家業が故郷で其の人を待つてゐた以外の殆ど悉くといつてもいゝ位に多くの同級生は、やがて學校を卒業すると、

巢立つた小鳥のあの嬉々とした羽撃きを高くしながら、それ／＼中等教員の口を見つけて勇ましく各地方に赴いた。さういふ中でわたしは獨り淋しく東京に居残つた。どうしても文筆を以て身を立てようと思ひながら。

けれども、わたしは先づ其の日の糧から稼ぎ出さねばならぬ境遇に身を置いてゐた。尤もわたしの自活は、十一歳の時から既に十餘年間續いてゐたので、今この當面の問題に對してもさう驚きあわてはしなかつた。しかし既に學校をも出たことである、出来ることなら今までのやうな自分の志す方面と全く縁もゆかりもない職業に依つての自活はしたくなかつた。そこでわたしは雜録の翻譯もすれば、速記者の冗漫極まる速記の書き直しもすれば、各方面の名士を訪問して其の高説の筆記もした。そして兎も角もか／＼の下宿料だけは稼ぎ得た。

かうして初めて書き出した文章を賣ることに依つてのわたしの生活が始まつてから、いつの間にかまた十年の餘も經つた。わたしは今にして自分の過去を顧る。

「十年の辛抱」を心に誓つたあの覺悟は、すぐれた作品の前に、すぐれた人間の前に、烈しい強い興奮を感じる毎に幾度びか心に繰返して新たに於て來たつもりであつたが、而かも遂に何物にも酬いられなかつた。わたしは今も依然たる奥下の阿蒙である。碌々としてしがない生活を一管の筆で支へてゐるに止まつてゐる。今だに一人前になり得ないでゐる。何といふ恥かしいことであらう。

わたしは今其の理由を考へて見る。それはいろいろあるやうに思はれる。先づ第一にはわたしが祝福された才能の持主でなかつたことが擧げられるであらう。けれども、これが果して今の自分の羞恥を自分に辯護する役に立つであらうか。なるほど、自分の才能の貧弱は自分の力の及ばぬ不幸である。後から自分で如何ともすることの出来ないやうに見える不幸である。しかし、かつてシャトウブリアンも言つたやうに、才能が根氣の外の何物でもないことも事實である。其の辛抱をわたしはモットオとして來たではないか。假令賦與された才能は凡庸であつ

たとしても、長い辛抱の功に依つて其の光と力は完全に發揚されねばならぬ筈ではないか。わたしは果して本當に長い辛抱をして來たか。

大きな才能を賦與されなかつたといふことは、賦與された小さな才能を完全に發揚する努力を怠つた辯護の理由にはならない。後者は明らかに自分自身の過失である。わたしは確に心には「十年の辛抱」を誓つてゐた。しかし實際の實行に於いて、それに應へるだけの努力をして來たか。そのモットオの通りに身を處して來たであらうか。そこに來ると、わたしは内心頗る慚愧たるものがある。

一體、わたしは文章を書き始めたそも／＼から其の針路を誤つてゐたやうである。わたしは前にも言つたやうに、生活の資を得る爲めに文章を書き始めた。初めて書いた文章でさへ既に若干の報酬を豫想してゐた。そしてまたそれを得た。これにはわたしの置かれた境遇がそれを止むなくした責任の一半は負うて呉れるであらう。しかし、さういふ賣文の行爲に依つて、自分の本質を生かさねばならぬ

本來の志を自らごまかしてゐた過失はどうしても蔽ふことが出来ない。而かも其の過失は年を逐うて次第に大きくなつた。文章の爲めに得られる報酬に依つて、兎も角も物質上の生活が立つやうになると、わたしは次第に賣れ易い文章を書くことの道を急いで、しかも喧れな仕事をしてゐるつもりであつた。何といふ愚劣な淺ましい生活であつたらう。

しかし、この本末を顛倒した自分の行爲にわたしも全く氣がつかないのではなかつた。可也しばし「十年の辛抱」を心に喚び起して、其の時々の自分の淺俗の姿に批判の眼は向けた。けれども、それは一時の興奮、一時の緊張に止まつた。物質生活の堪へ難き日々の壓迫は、先づこれを撥ね返す當面の努力を殆ど不斷に要求した。わたしは其の要求に應へる爲めに、いつかまた本然の我を忘れて目前の營みに目を向けた。そしてぐづぐづの間だんぐづと淺俗の我の姿を大きくして行つた。

而かもそれが、單に本然の我の要求を閑却しただけであつたならば、いつかまた機會が到來すれば、本然の我を生かして其處に自己本來の面目を見る喜びに出會ふことも出來たであらう。けれども人間の生活に於いては、内的要求と外的要求と、全く相離れて存在するものではない。寧ろ常に有機的に相聯關して互ひに影響し合つてゐる。淺俗の我の姿が大きくなるにつれて本然の我の姿は次第にそこなはれ、歪められ、時には全く變質された様に見える事さへある。

わたしが初めて文壇へ出た時は、丁度自然主義の勃興期であつた。わたしも諸先輩の驥尾に附して自然主義の爲めに戰つた。しかし、わたしは果してあの時心から戰はねばならぬ要求を感じて戰つたであらうか。(わたしは今それを冷かに回顧する。)わたしは果してあの時眞に自然主義の主張と合致する要求を心の内に感じて戰つたであらうか。わたしはあの時人生の無解決を力説し、意志の自由を否定し、世界人生の器械的なるを認めてそれを高調した。而かもそれと同時に、何

等かの欲望を以て常に活動してゐる自己の存在を主張した。そして其の欲望は、常に自發的に實現さるべく活動してゐるものであることを主張した。そしてそれが、欲望を以て活動してゐる状態が當時のわたし自身であることを言明してかう言つた。「だから、わたしなるものを客觀的に後から見た場合には、偏に自然力の跳梁に一身を委ねたことになる。けれども、欲望を以て活動してゐるわたし自身を、其の當時に於いて主觀的に見れば、其の實現を期して充實せる生を營んでゐるのが眞實の状態である。丁度、我々人間はいつかは必ず死なねばならぬのだが、それがいつであるかが分らぬので、今日生存すべきあらゆる手段方法を盡してゐると同じやうに、其の欲望の實現される程度が豫め定まつてゐぬので、其の實現を期するに全力を擧げて従つてゐるのである。わたしが自然主義的的人生觀を抱いてゐながら、生の努力の意義を認め、且つそれを實際に行ひつゝあるのはこれが爲である。」と。

かくしてわたしは、客觀的に上から見る時には、世界も人生も全く機械的、決定的であるが、下から主觀的に見た時には、人間の努力は自由でそして必ず酬いらるべきものであると言つた。そしてわたしはこの自分の考から未來の可能を信じて積極的生活を主張した。この考は、そしてこの主張は、今のわたしにあつても少しも變らない。わたしは依然として未來の可能を信じながら、其の時其の日にベストを盡して行く積極的生活を自分の信條としてゐる。

従つて、わたしの受けた自然主義の影響の中には絶望も虚無もなかつた。所謂灰色の世界もなかつた。わたしには寧ろ根強い現實から歩み出して、充實した生を營んで行かうとする光明の暗示があつた位である。それ故わたしは、あの頃一二の短篇を作つた時にも、現實の人生を描いて人心の機微に觸れようとした事はある。けれども、嘗て絶望の人生を描いて其處に自分の主張を託さうとした事はなかつた。

所が、わたしは其の後幾年か経つて、ある人から受取つた私信の中に次ぎのやうな事が書かれてゐたのを見出して驚いた。それにはかうあつた。——「あなた方が盛んに自然派の爲めにお作をされた頃、あなた方にはお解りにならぬかも知れませんが、その後の若い者の苦しみは大したものでした。あなた方には作品といふ自分の洩らし場もあつたでせうが、その人にはそれもありませんでした。あなた方のお書きになつたもので皆若い者は人生の望みなんてものを亡くして了つたのです。私は斯ういふ苦しみを嘗めた人で此の頃どうにか斯うにか頭を擡げた人を幾人か知つてゐます。年上のものが何氣なくした事が子供には甚い打撃になる事がよくあるものです。」

わたしはしかし當時盛んに作はしなかつた。けれども議論は可也した。殊に若い人達に向つて文章の事を、藝術の事を、人生の事を話した事は度々あつた。もしさうした時のわたしの意見が、かうした影響を多くの人に與へたとすればわた

しの罪は正に萬死に當る。しかし、わたしはそれを信ずることが出来ない。なぜなら、わたし自身が何等の絶望をも虚無をも感じてゐなかつた時に、わたしから出る言葉に依つて他人を絶望させることが出来ようとは思はれぬからである。

ここまで来た時、わたしは當時の自分の思想が、眞の自然主義の精神と合致してゐなかつたことを發見する。一切の否定の中でわたしは満足することが出来なかつた。それ故小さい自己を其の否定された人生の中で覺束なくも立て、行かうとした。そして其の主張に積極的生活の名を附した。積極的生活と自然主義、わたしの心の中では其處に何の矛盾も杆格も衝突も見られなかつた。しかし、客觀的には無理な命題であつたかも知れない。確か今年の春頃であつたかと思ふ。田山さんがわたしに宛てた手紙の體で本誌に感想を書かれた時に、わたしが其の當時から自然主義に満足してゐなかつたことを指摘された。そしてわたしが一種の理想を立て、人生に臨まうとしてゐたことを指摘された。わたしは其の時非常に

感奮した。田山さんはわたしに自分の主張をまつすぐに貫くやうにと勵まされたからである。

しかるにわたしは何といふ頓馬であらう。かつて大きな潮流に漂はされて、自分の本然の姿を見失つたと同様に、今もなほ物質生活に累はされて自分の信ずる道を行けずにある。常に淺俗の我の跳梁に壓倒されて本然の我を守ることが出来ずにある。かつて誓つた「十年の辛抱」も、本然の我を發揚する爲めに爲遂げたならば、今更ら一人前になれずにある悲哀を感ぜずともよかつたであらう。自然主義から受けた教訓に依つて、其の時其の日にベストを盡す生活はして來たが、而かもそれは、物質生活に不斷に脅かされつゝある淺俗の我を生かすことが主であつた。そしてさうする間に、本然の我がいつか次第に其の姿を歪められ、蠶食されて、漸く淺俗の我と握手しようとしてゐたことには氣がつかなかつた。何といふ嗤ふべきわたしであらう。

しかし諸君、わたしは何の爲めに自分の愚劣を茲に打ちまけて、諸君の前に暴らさうとするのであらう。日本の文壇及び思想界は、殆ど不斷に動搖しつゝある。非常に猛烈な勢ひで推移しつゝある。昨日の主義が今日は棄てられ、今日の思想が明日は顧みられなくなる事實も決して珍らしくない。諸君はさういふ中で精神の糧を得つゝある。先に立つて銘々の仕事をした人達が、やがて八方に散らばつて行く時、諸君ほどの道を選ぶべきかに惑ふことがあるであらう。そしてともすれば置き去りを食ふことがあるであらう。

わたしが自分の愚劣を表白するのは、諸君をさういふ目に遭はせたくない爲めが一つ、も一つは物質生活の爲めに本來の要求を減させたくないからである。諸君は先づ諸君の本然の姿をしつかりと見定めて、其の要求に従つて一向専念に精進すべきである。



## 數人の作家の噂

下蛇窪にて水野君。

をととひの晩は失敬した。いつも話の盡きない君と折角逢ひながら、あんなに呆氣なく別れてしまつてはほんとに残念だつた。僅かに數寄屋橋から鍋町の方を一まはりして、銀座の交叉點へ来るまでのちよつとした時間だけでは、ほんとに何を話し何を聴くといふ暇もなかつた。尤もあの時あんな口振りだつたから、もしかしたらゆうべの會には出て来るかとも思つて心待ちにしてゐたが、來なかつたね。僕もゆうべは大分遅くなつてから出席した。といふのは、晝過ぎにちよつとのつもりで窪田君を飯田館に訪ねて行つて、たうとう八時近くまで其處で話し

込んでしまつたからだ。

會の方には花袋、藤村、天溪、小劍、葵、秋江、白鳥、無想庵の諸氏が集まつてゐた。もう飲むことや食ふことには大抵飽いてしまつて、みんなは例の罪のない話に笑ひ興じてゐた。生田君が西洋の肩を持つて日本の設備をくさすやうな話をすれば、忽ち武林君が媿々焉とまぜつかへして混沌とさせてしまつたり、かと思ふと、島崎さんがあの落ちついた調子で、「そんなことがあつたかねえ？」と生田君の言ひ出した事に軽い不審を打つて置いて、「さうく、そんなことがあつた。あつた。ほんとにさういふ夢を見たのだつたよ、」などと際どい所で落城して、やんやと喝采を博したり、それは中々陽氣であつた。

さういふ中で、僕は武林君に、「よく食ふなあ、」と笑はれながら、貪るやうに手盛で飯を幾杯か食べて、やつと腹だけはこしらへられたが、それはもうやがて散會といふとさくさく近くであつた。

君はまだ知らぬであらうが、この頃の龍土會は、ほんとに水入らずと言つた形で、僕など故郷にでも歸つたやうな打寛いだらくな氣持でゐられるけれど、それにしてもゆうべの會は僕にはあまり呆氣なかつた。罪は無論こつちの遅刻にあるのだから、何もそれを兎や角いふのではないが、顔を出したと思ふと、もう散會はひどく物足りなかつた。

それに今夜の帝劇もまた可なり呆氣ない方だつた。をとつひの晩君に話しておいたやうに、僕は今夜女優劇を見に行つて來た。地方の人達なども大分見物人の中に混つてゐて、入りは殆んど満員に近かつたが、芝居は大して面白くなかつた。それでも中幕の『柳櫻曲輪斬』だけは、さすがに宗十郎、勘彌、東藏の振りの手面白く見られたけれど、一番目の『武家義理譚』には何處にも西鶴の觀た世の中の匂ひを嗅ぎ出しやうもなかつた。二番目の喜劇『ドツチャダンネ』に至つては、誠にはや馬鹿々々しくも面白かつた、と言へばそれで事済むやうな例の女優畑の

どんちゃん物で、これが劇かと今更ながら感心して見てゐる人達の多いのに感心しながら、途中で其の呆氣なさの目を覺まして、今歸つて來た所である。

呆氣なさと言へば君。この頃の文壇にも、随分呆氣ない議論がどつさりあるやうではないか。例へば自然主義はかうするから滅びるとか、享樂派が墮落して遊蕩文學が撲滅されたとか、されぬとか、人道主義が一番有望だとかなんとか言つて、だいぶ賑かだが併しやかましいと思つてゐるうちに、今度はまた、傳統主義の世の中にならねばならぬ、といふやうなむづかしい問題が持ち上つて來てゐるやうである。或ひはもう今頃はモウリス・バレスの物を夜を日に繼いで翻譯してゐる人があるかも知れない。

併し君、主義とか思潮とかいふものは、さう春の雪のやうにいつの間にか消えてなくなつたり、雨後の筍のやうに、無闇にむくむくと首を擡げて來たりするものではあるまいと思ふ。揚つた一つの浪が平穩に落ちつくのは、可也遠くまで其

の影響を及ぼしてからだからね。思潮や主義がさう容易く机の上の議論などで消えたり生れたりしやうないではないか。併し、さうかと言つて、僕が時代の推移を否むものだと思つては困る。推移の跡は、見給へ、思潮の一波一動の具體化とも見るべき作品に氣を附けておればよく分るから。いや兎に角議論よりは創作のことだ。創作の方には、少くとも机の上で捏上げる議論などには到底見られぬやうな作家達の體感が輝いてゐる。

實はこの間も、何か文壇の近事に就いて言ひたいことはないかと人から言はれたので、久し振りで色々の創作を讀んで見た。そして僕はすべてを讚美したいと思つた。實際、讀むといふことは、藝術を味ふといふことは、幸福だからね。この幸福を與へて呉れる作品に對して、作者に對して、何を餘計な註文など持ち出さうぞ。たゞ感謝さへすればよいのである。苟くも不満の念を抱くといふのは、取りも直さず僭越だ。冒瀆だ。若しまたどうでもいやなら、讀まなければそれで

よいではないか。と、かう身も蓋もなく言つて澄ましてゐられる讀書子の身分ならば、僕等もほんとにらくでよいのだけれど、さうばかりも言つてゐられぬやうな悲しい位置に身體を置いてゐる我々だ。無理にも何か不足がましいことを探し出して彼是れ言つて見なければならぬ場合もある。考へて見れば因果な譯さ。

それにしても水野君。君はこの頃創作をどうしてしまつた。久しく何にも發表しないではないか。例の、この間も君が話してゐた告白なども、デッサンの儘にしておくのはいかにも惜しい。今一と骨折つて渾然たる藝術品に纏めてしまつたらどうだ。自然主義の全盛時代には、随分思ひきつた本氣な告白にさへ、作者の本然の姿を認めるに吝かであつた世の中も、聞けばこの節は、蛙を踏み潰した歎きにさへ、無造作に人道主義の名を冠するといふ事だ。さういふ中へ、生血の滴るやうな告白を投出して見るのも一興ではないか。

それに君は、この間から書く／＼と言つてゐた『田山花袋論』をどうしたね。

書いたかい。あれは何でも、同氏の「時」と「自然」とに對する觀方を内面的に批評するとかいふ話だつたね。生きた自然の心を端的に擱んでゐる君の事だから、さぞ徹底した批評をすることであらう。早く見たいものだ。

が、僕にも少しばかり言はせて見て呉れたまへ。君はどういふ風に見てゐるか知らないが、一體田山さんの「時」なり「自然」なりに對する考へは、「自然の無關心」といふ一語で其の大綱を擱むことが出来るやうに思はれる。そしてこの考へは、數ある其の作の中でも、殊に、『時は過ぎ行く』の中に最もよく現はれてゐるやうだ。あの作の主人公の良太は、ある意味に於いて、「時」の象徴とも見ることが出来ると思ふ。

併し水野君。僕の見るところに依ると、氏のこの「自然の無關心」は、いつも上からばかり、「全」からばかり「時」を觀、「自然」を觀てゐる所から來たもので、下から、「個」から觀た姿ではないやうに思はれる。試みに下から小さく出發し

て、「個」の生々活動の意義を謙遜にちつと見詰めて見給へ。其處に人生の可能が成立ち、所謂雑多紛々のあらゆる現實が、悉く目覺めるやうな獨自の色を着けて躍然として現はれるであらう。即ち同じ一時間の「時」にしても、下から見れば、「個」から見れば、甲の人の一時間と乙の人の一時間とは、其の質をも、其の量をも、其の價值をも明瞭に異にしてゐるであらう。

けれども、もしこれを上から、大きな「自然」の眼から見たらどうであるか。誠に蠢爾と言ふにも足らぬであらう。或ひは同一色に全く塗り潰されて、何の區別も、何の相違さへも認められないかも知れない。而もこの觀方もまた眞理である。少くとも動かすべからざる一面の眞理である。田山さんの所謂「自然の無關心」は、實に茲に其の基礎を置いてゐるのである。

併しながら、その觀方を何處までも押し詰めて行くと、どうなるか。人生は全く努力の甲斐のないものになつて、徒らに儂く、「個」の存在の意義など殆ど認め

られぬであらう。これは到底我々の堪へられぬ所である。寧ろいかに小さくとも、下から生きて動いてゐる「個」から出發して、一動一作の末にもなほ且つ悉く甚深の意義を賦與した方がよい。其處に人生の肯定があり、積極的生活がある。

田山さんの「愛慾」に就いての考へ方もまたさうである。『一兵卒の銃殺』に見えた「愛慾」も、『お八重』に見えた「愛慾」も、共に「個」の研究を以て始まつてゐる。而も其の實質は、却つて「全」の解釋を「個」の上に適用した形になつてゐる。水野君、君も知つてゐる通り、田山さんはよく自他の融合といふことをいふ。而も氏のこの融合の中には、他が勝ち、客觀が勝ち、全が勝つて、個の、主觀の、自の抑へられてゐる場合の方が多いやうだ。君はこれをどう見るか。僕は自然の堂奥に入つて、其の神祕を探らうとする田山さんの努力が、ともすれば、「自然の無關心」に威壓されて、「愛慾」の、「自然」の、「時」の放出した目に見えぬ一線にぐる／＼と圍繞されて、それから脱け出ることが出來ずにゐるやうな

形になつてはゐないかと思ふ。そして恐らくはこれが、この宿命論的の觀念が、あの調子の明るい氏の作品の上にさへ常に一味の暗い淋しい影を落してゐる所以ではないかと思ふ。

水野君。かう言つて來た所で、僕は島崎さんの『海へ』を思ひ出した。君も讀んだであらうが、あの作にもまたこの威壓の影が見えてゐた。尤も『海へ』の「威壓」は、「苦しい生活」といふ極めて直接なものから來ただけあつて、其の調子は遙に重苦しいものだつた。けれども、あの、苦みをも楽しく苦しもうとするフランスのバリーから歸つて來た島崎さんは、この苦しい生活の威壓をどう取り扱つたか。ちつと堪へ忍ばうとする氏の本來の男らしい面目と共に、それを藝術として表現することに依つて、自ら慰めようとした作者の氣持も可也鮮明に見えてゐた。

かくして、島崎さんも遂に純然たる藝術家である。田山さんもまた純然たる藝

術家である。この二人の人の苦しみは、修養は、経験は、悉く藝術家としての経験である、修養である、苦しみである。人間としての要求が先づあつて、而して後にそれがひつくり返つて藝術になつたといふ趣きは、よしあつたとしても、極めて稀薄である。田山<sup>す</sup>さんが常に「自然の無關心」を力説しながら、而も人生の推移に對して、ともすれば嗟嘆の聲を放たずにはゐられぬのは氏が藝術家だからである。また島崎さんが、「人生をして趨くままに趨かしめよ」と時折抛つやうに叫びながら、而もそれにちつと「觀察」の目を据ゑてゐるのも氏が藝術家だからである。

所が水野君。この人達に比べて見ると、上司君は全く其の所屬を異にしてゐる人のやうに思はれる。例へばちよつと物を観るにしても、氏の觀方は田山さんや島崎さんとは違つてゐる。づかづかと其の中にはひつて行つて、ぐつと觀念の眼を見開くといつたやうな冒険は決してしない。寧ろ、いつでも徐ろに一步退いて、

脇からこれを冷かに観てゐるといつた趣きだ。従つて氏の觀方はいつでも批評的である。知的である。いかなる場合にも物と共に溺れるやうなことがない。これは併し、何處から來るのであらうか。いふまでもなく、僕は主義を持つ人の特徴が其處に現はれるのだと見たいのである。なぜなら、既に主義がある。物をはかる尺度がある。勢ひ渦中に入らずに、局外に立つて、冷然と物を観る餘裕があるからである。

而もこの、主義を持つた人の作品に、熱がないといふ不足をしばしば聞くのは何故であらうか。理由は至極簡單だ。即ち、それが知的だからだ。批評的だからだ。けれども、なほ若し言ひ添へ得べくんば、作者が主義を背景とした要求を以て直ちに現在に臨むことをしないからである。

確か岩野君であつたと思ふ。上司君は小川君と共に最も多く郷土藝術家としての資質を持つた人である。然るに彼が思ひきつて大阪に住まうとしないのは、彼

自身の生活を深めて行かうとする気がないからだ。東京に未練があるからだといふ意味のことを言つたのは。いかにも上司君の取扱ふ題材には大阪の事が多い。そしてさういふ作品にはまた、大阪情調がよく出てゐるといはれる。けれども、これを直ちに氏の本領が郷土藝術にあるとするのはあまりに簡単な片附け方である。僕は寧ろ、『生存を拒絶する人』に見えたやうな作者のあの要求が、氏の最も得意な日常茶飯事の描寫の上にも、所謂大阪情調に富んだ郷土藝術の上にも、根強く、併し必ずしも明かではなく、現はれて來ることを望みたいと思ふ。

水野君。何かと人の噂をしてゐるうちに、だいぶ長い手紙を書いた。けれども、ここまで書いた筆ついでだ。もう少しいろんな人の事を、——例へば小川末明君が、事實もしくは事實の意義を描かうとするよりも、寧ろ事實の作者に及ぼす感情を抒べるに急な主情派の人である事や、高濱虚子氏がいかにもものんびりと氣持のよいほど行き届いた筆つきで、在りの儘の日記を書きながら、常識的ではある

が、併し、何人をもたんのうさせる人生の味を出すすぐれた寫生文家であることや、武者小路實篤氏が單純過ぎるほど單純な、一本調子な心理描寫をして行きながら、それでゐて人に迫る力を持つてゐる善人であることや、更にまた一般的には、ともすれば人氣のある作者を數人に止めて、餘の者を悉く衰へてしまつたやうに言はうとする文壇の狭量やを細かく書いて見たいと思ふのだけれど、いかにしても今夜は夜が更けた。だいぶ腰のあたりも冷えくする。……では一と先づ筆を擱くこと、しよう。おやすみ。

## 二つの退屈

ふとした機会があつて、まことに久しぶりで十一月の帝劇を見た。震災以來はじめてである。出し物の中に太功記の十段目があつた。この芝居はわたしには非常に親しみがある。まだ七八つの子供のころから村の芋掘芝居の稽古でもたびたび見れば、自分達の仲間の一緒にもう幾むかしも前に、自分の生れた家や近所の農家の物置の中や何かで、「夕顔棚のこなたより」などとまね事をした事さへも幾度かあつたものだからである。

わたしは興味を以て舞臺をながめてゐた。

ところが、何といふことだつたらう！ わたしの心はまつたく豫期に反いて行

つた。松助の皐月や梅幸の操を見てゐるうちにどうにもやりきれなく退屈になつて來た。宗十郎の十次郎も退屈なら幸四郎の光秀も我慢が出来なくなつて來た。

「操のかゞみ曇りなく」などところちよぼがやつて來ると、思はず「あゝあ」とあくびが出た。操の所作のひとくさりが何十分もかゝるやうな長い／＼氣がして來た。

が、それでもわたしはちつと舞臺をながめてゐた。と、その目の前に『三人姉妹』のアンドレイが乳母車を押しながら靜かに現はれて來た。樫の並木が彼の憂鬱を強めるやうに舞臺のなかばを領して奥の方まで列なつてゐる。彼は軽く舌打をすると、下唇を固く噛んで、頭を掉つて、黙々と乳母車を押ししてゐる。築地小劇場の暗い座席にわたしはゐるのである。アンドレイの人生は退屈だが、觀てゐるわたしは心が張つてゐる。やりきれない人生の中に誰も彼れもがゐるのだけけれども、そこにはスキートな涙がある……。

「あゝあ！」と、わたしは太息をついた途端に、はツとして目を擧げた。



「ちよございな諫言立て、無用な舌の根動かすな」と光秀が太い眉をびく／＼とさせたからである。

が、やつぱりこの芝居でも是認されるのは男の光秀だけである。光秀の氣持だけである。ずつとむかしの子供のころは、彼れを大悪人だと思つてわたしは憎んでゐたのであつたが。

—「文藝行動」・大正十四年十一月二十九日—

### 燈火親しむべき頃

暑い夏だつた。實に暑い夏だつた。殆ど雨らしい雨も降らずに、炎天つづきであつた凡そ四十餘日の間、毎日の最高温度が九十何度といふのだからたまつたものではなかつた。われ／＼どもの小さな家では、夜の二時になつてもなほ疊がどか／＼してゐて、裸でゐても汗がじと／＼出た。

中央氣象臺が始まつて以來、六十何年間にも曾てなかつた暑い夏だつたといふから、一體それ以前のいつの年にかういふ夏があつたのか、或ひは、今、生きてゐる人たちのすべてに取つて生れて始めての暑い夏だつたかも知れないのである。たまたま一方に支那事變が起つてゐて、炎熱百二三十度の現地で、わが皇軍

の將兵諸君が勇躍戰鬥に従事してゐる勞苦のほどを思へばこそ、暑いなどは誰もいつてはゐなかつたが、さもなかつたら、とてもたまらない苦熱を人々は訴へたことだつたらう。

が、九月に入ると、さすがに朝夕は秋らしい爽涼の氣が濃くなつて、心身共に頗に快適をおぼえて來た。と、また、毎年の初秋の例で、韓愈の讀「書城南」の詩がおのづから頭にのぼつて來る。「時秋にして積雨霽れ、新涼郊墟に入る。燈火やや親しむべく、簡編卷舒すべし」と。

實際、苦熱に悩まされつくした後に涼しい秋の夜が長くなつて、蚊もだん／＼とゐなくなつて來る頃の讀書慾は、たしかにふだんよりは二倍三倍される。秋の夜が燈火親しむべく、讀書の好季節といはれる所以である。

○ わたしは此夏の炎暑の中で、専ら『保元物語』の現代語譯を試みてゐたが、わ

が古典文學の現代語譯は、見やうによつては外國物の翻譯などより遙かにむづかしいところがある。わたしは多年、英文や佛文の翻譯をして來てゐるが、今度のやうに、まるで見當もつかない困難に出會つたことは多くなかつた。いや／＼、それだけではなかつた。あの簡勁な和漢混淆文を、今日の此平板な口語文に代へるといふやうなことは、正しく一種の冒瀆ではないかとさへ思つたこともしば／＼だつた。

が、また、極めて稀にはあつたが、原文の氣分と調子を、今の言葉で、そつくりそのまま現はし得た氣のした時の喜びといつたらなかつた。と共に、辭書にもなければ、勿論、在來の註釋書にも殆どわかりかねてゐたやうな言葉などを、ゆくりなくも自分がもとから知つてゐて、らく／＼とたゞしく譯し得た時の喜びなどもないことはなかつた。

一例をこゝに擧げて見よう。「白河殿攻落す事」のはじめのほうに、

爲朝あまりに腹をたてて、此矢をいかなくつてなげ捨て、「おのれ程の者をば、矢だうなに、手取にせん」とてかけたまへば、須藤九郎家季、悪七別當以下、例の二十八騎を續きたる。

といふところがあるが、この「矢だうな」の「だうな」といふ言葉である。これは『源平盛衰記』の卷第二十一「小坪合戦の事」の中ほどにも、「敵一人をあまたして射る事あるべからず、箭だうなに相引してあやまちすな」とあつて前後の文章のつゞきあひから、「矢を用ひずに」といふ意味であることは誰にもたやすく想像されるのだが、しかも、この語をもつて、多くの人は廢語か何かのやうに扱つてゐる。中には「此語詳かならず」とあつさり兜をぬいでしまつてゐる註釋者もある。

ところが、わたしに取つては、これが極めてフアミリーな言葉であつて、今もなほ生き生きと生きてゐる現代語なのである。といふのは、子供のころから、わ

たしはしばしばこの言葉でもつて亡父から叱られて、身にしみくとおぼえてゐるからである。で、今この用語例をこゝに披露することは、やがてわたしの幼時の思ひ出の一つであり、亡父のなつかしい追憶の一つでもある。

わたしは子供のころから實によく夜を更かして、書物に讀み耽る癖があつた。四十餘年前のことで、勿論、電燈などはまだなかつた。小さな置ランプの薄暗い光の下で、一心に書物に向つてゐると、いつか夜は、しん／＼と更け渡つて、裏の土藏の廂のはうの鳥屋で一番鶏が鳴いたりする。時には二番鶏の鳴くことすらある。そんな時に、ふと、父が一眠りして眼を覺ましたりすると、襖の隙から漏れるランプの光に、子供のわたしがまだ起きてゐるのに氣がつくのである。

「これ／＼、まだ起きてゐるのか、油だうなの寝ろ／＼。」

わたしは生返事をして、時には二度も三度も親父に聲をかけられたこともあるが、この「油だうな」の「だうな」が即ち「矢だうな」の「だうな」と全く同じ

場合に使はれてゐるのである。「油をむだづかひせず」の意で、もう一步進んで  
バラフリーズすれば、「油をむだにつかふのはもつたないから」の意であるこ  
とが明かだ。即ち爲朝の場合の「矢だうな」も、小坪合戦の時の「箭だうな」も、  
これではつきりと解釋がつくのである。

○  
わたしの郷國（甲斐）には不思議に今もなほ古語がいくらかも生き残つてゐる。  
少しく格式のある舊家などでは、夜、客人に「さあ、どうぞ、おやすみなさいま  
せ」とでもいふところを、

「どうかぎよしなつて」といふ。

「ぎよしなつて、何の事ずら？」

若い者たちは斯ういつてよく可笑しがつたりするが、これが「どうぞ御寝なす  
つて」の意であることは、ちよつと考へて見ればすぐに分るのである。

又「どこ／＼へ行かう」といふことを「どこ／＼へ行かず」といふ。例へば、  
「あした、映畫へ行かず」といふ風にいふのである。明かに言葉の上では反對にな  
つてゐて可笑しいが、これは「行か／＼」が約まつたので、國語の本來の語義に  
は却つてかなつてゐるのである。

「これを一つ酒の肴にでもしてやらす。」

といふのも同じ語法の一例である。

庭園をおつぼ、粉などの容器をほかろ、大工を番匠、金持をお大盡、涼み臺を  
はまゆか、考へ深い人をしりょうしん（思慮深）の人、盟をはんぞう（半槽）、薪  
をもしき（燃木）、蛇をながむしといふやうな例はまだ／＼いくらかもある。地方々  
々の言葉をむやみに訛言視、方言視しないで、それこそしりょうしんに考へると、  
存外それらの言葉の中に、すでに廢語視されてしまつてゐる古語などの生きて残  
つてゐるのが發見されるかも知れないのである。

○  
座右に在つに一書を取つて、ばらつと開いて見ると、ちやうどそこにこんな言葉があつた。

「この世で金の無いのは辛い。金で頭を抑へつけられてゐると云ふことは最も不幸である。この貴い人間が金をもたない爲に、自由を束縛されると云ふことは不幸である。」

「なるほど！」と、一應はうなづいたが、しかし、これだけではまだかたことに過ぎない氣がする。頗る徹底を缺いてゐる憾みがある。なぜなら、金は人間の世において眞に生きてゐるものだからである。おもしろのやうに、鑽のやうに、たゞ人間の頭を抑へつけたり、人間の自由を束縛したりするものではないからである。金には氣格がある。性格がある。斷じて死物ではないのである。その持主とタイアップして、非常な偉力を發揮するところの存在である。しかるに、この存在を

一種の物質かのやうに、漠然と向うへおいて、憎惡の眼で見てゐたところで仕方がない。

で、また其書の數ページをばら／＼とめくつて見た。

「この世の富豪とか、名士とかいはれてゐる人間は、大抵恥知らずか、法螺吹きにきまつてゐる。強慾非道の面の皮の千枚張り」と云ふ奴等が、うんと金儲けをするのである。」

まるで何か私憤でも漏らしてゐるやうな激語であるが、これにも、しかし、一面の眞理がないことはない。とはいへ、金の問題は、その問題の本質は、儲けるところにあるのでなくて、儲けた金をいかに運用するかにあるのである。ちやうど大學を卒業した者が、豊富な學資を貰つてであらうと、貧乏で苦學した擧句であらうと、或ひは又、一生懸命に勉強してであらうと、半ばのほほんで遊樂三昧に暮してであらうと、さういふ經過は問ふ必要がなく、一人前になり得た其教養

を、將來いかに此世の中に活かして用ひるかに在るのと同じである。

○

一たい貧は悪か？ わたしは徹頭徹尾まづしい生涯を在り經て來たから、自分の貧乏は殆ど全く氣にしないのだが、人の貧乏を目にする時にしばく此問を自分にかけてはゐられないものがある。

なぜか？ 私の身邊にゐるわたし以外の貧乏な人たちは、貧乏をしきりに氣にして、自分をも不愉快にすれば他人をも不愉快にするからである。人間生活の最善が幸福に一生を送るといふことであるとすれば、その幸福をむしばむやうな不快な感じを與へることは悪でなければならぬ。貧は果して悪か？

金さへあれば満たされる人間の慾望が、従つて幸福が、今の世の生活に無限にあることは事實である。金がなければ満たされない人間の慾望の、従つて幸福の、今の世の生活に無限にあることも事實である。しかし、金があつても、いくらあ

つても、持ち來すことの出來ない人間の幸福が無限に此世にあることもまた事實である。いやいや、金なんかちつともなくとも、悠然として南山を見ることの出來るのもまた更に儼とした事實である。

貧は、して見れば、必ずしも悪ではない。

貧に處するの道を知らないものがたま／＼悪を働くのである。

貧にして猶且つ悠然として生を樂しんでゐることは、しかし、中々容易なことではないであらう。孔子も、「貧にして怨みなきは難く、富みて驕るなきは易し」といつてゐる。だが願はくば、貧故に人を不愉快にしまいとだけの心がけは持ちたいものである。が、それすら容易に出來ないならば、然らば早く貧乏の域を脱して金を持つて自ら樂しむやうにするがよい。不愉快な感じを人に與へないといふ徳義だけなり守るやうにするがよい。

○

「賢なるかな回や。一簞の食一瓢の飲、陋巷に在りて、人はその憂に堪へざらむも、回やその樂みを改めず。賢なるかな回や。」

孔子の言つたこの言葉をわたしはよく好んで誦し返す。そして顔回の窮乏に處して泰然としてゐた心境に、いつか自分も參し得るやうになつたのを喜んでゐる。

○  
が、しかし、それもこれも書物が座右にあればこそである。讀む書物もなくしてそして貧乏な生活は、知識ある者の恐らくはよく堪へ得るところではないであらう。

「金錢を一ばいにした財囊を有せんよりはむしろ書籍を一ばいにした書齋を有せよ。」

とリリーは言つてゐる。

「部屋に書物がないのは身體に精神がないやうなものだ。」

とキケロも言つてゐる。

實際書物さへあれば、それをよく讀みさへすれば、自ら精神が活躍する。精神が活躍すれば、新天地がそこから展けて来る。生々化育の進歩もそこに在る。

○  
とはいへ、難有い、忝いと思ふやうな人の言葉に接しないこともすでに久しい。年を取るにつれていよ／＼さういふ機會が少くなつて来るやうである。

秋の夜のしいんと獨りの氣が澄んだ時に、靜かに過去を省み、現在、未來を想つて見ると、ひどくそれが淋しく思はれて来る。

## 築城師の覺悟

「利口な子供は馬鹿になる。これほど確かな事はない。」

といふ文句を、わたしは教育の聖書といはれる『エミール』の或譯本の中で見つけて、びつくりした。いかに奇矯な、逆説的な、爆弾的な斷言をしぼく敢てしたルソーにしても、これは少し無茶だと思はざるを得なかつたからである。

そこで、英譯の『エミール』を書棚から出して、そのところを調べて見ると、

*"Pottle-headed children become commonplace men. I know of no observation more general and more certain than this."*

とある。即ち、

「頭のからつぽな子供は平凡な大人になる。わたしはこれくらゐ一般的な、確實な觀察を外には知らない。」

とでも譯すべきところであらう。それにしても、あまりにひどい違ひやうであるから、或ひはフランスの原文には、「利口な子供は馬鹿になる」云々とあるのかも知れないと思はれるが、あいにく手許にフランスの原書がないから、これは今調べて見ることが出来ない。甚だ残念が氣がしながら、ついでにもう少しこの譯書を読み進んで見ると、ローマの獨裁官のストラの家の控室が、「シルラの拜殿」となつて、生ける獨裁官が祀られた神さまに扱はれてゐたり、その一二行さきには、

「又若しシーザーが居なかつたならば、カトーはシーザーの非凡な天才を洞察し、其の策を見抜く事が出來ず、爲めに寢呆氣者として馬鹿にされたに違ひな



といふ文句があつたりする。もしシーザーがゐなかつたならば、カトーでなくともシーザーの非凡な天才を洞察し、その策を見抜く事は出来ないのにと、ルソンの無理な註文に驚かされながら、英譯書を見ると、

「もしシーザーが生きてゐなかつたならば、その有害な天才を看破り、その全計畫を早くから豫見したこのカトーその人を、多分、人々はいつまでも一己の夢想家として扱つたであらう。」

とでも譯すべき文句がそこに在つた。子供の賢愚を性急に判断してはいけないといふことをルソーが極言して居るところであるから、多分このはうが彼れの本當の考へであらう。

が、なほ、「しかし」と思つて、この和譯書のはうを讀み調べて見ると、いたるところに意味の不明な、曖昧な、理窟の通らない、矛盾、撞着だらけの文章

がある。して見ると、この譯書は必ずしもフランスの原文に忠實なものともいへなささうに思はれる。

しかも更に驚くべきことには、この書が我が國の讀書界に大いに受けて、盛んに版を重ねたことである。わたしの手許に在るのの奥附を見ると、實に九年間に三十三版を重ねてゐる。恐らくはその後もすでに數年を経てゐるから、今は更にもつと版を重ねてゐるであらう。

が、わたしは、この書の誤譯を指摘しようと思つて、こんな事を書いてゐるのではないのである。思ふに、この書の讀者は、この書の文章をそこにある通りに信じて、そこから頗る難解なルソンの思想を嗅ぎ出し、探り出さうと努力したことであつたらうが、……と思ふと、文章といふものは迂濶に書くべきものではないとつくづく痛感したのである。

實際、文章は恐ろしい。「朝」と書くと、世界は同時に朝になるし、「夜」と書

くと夜になる。「花子は美しかつた」と書くと、花子は美しくなるが、「太郎は不良であつた」と書くと、太郎は不良になる。何もかもが自由にペン先から生み出される。現実の世界と全然ちがつた世界が實際に在つた世界として永久に創造されて残つて行くことさへ有り得るのである。新聞や雑誌の記事などを見て、うつかりそれを鵜呑にすると、前に述べた『エミール』の譯書におけると同じ過誤に陥るだらう。

○

すべて秘密を知るといふことは危険である。昔、中野長者は、お金を畑の隅か何かに埋めるために下男を連れて行つて、歸りに淀橋のほとりまで来ると、うしろからばさつとやつて、流の中へ蹴込んだといふことだ。長者と一しよに行つて、秘密の場所を知つた下男は一人として歸つて来なかつたといふことだ。無理に毒を盛らされた御殿醫が、秘密を知つたからには生かしてはおかれないとて、まづ

血祭にあげられるといふ話は、よくお家騒動の芝居などにも出て来て、わたしたちにも珍しくない。

但し、かういふ事で悪人のために犠牲にされたりするのは馬鹿々々しくて、下らなくて、甚だありがたくない話であるが、別にまた、昔の築城家のやうな場合も有り得て、これにはわたしも大いに考へさせられた。それはかうである。——昔の築城師が城を造ると、それが極めて微妙な、秘密の多い城であればあるほど、かれは城の構圖の一切の秘密を知る唯一の人であるため、生かしてはおかれないとて生命を召されるのが常であつたが、築城師はまたよくこれを知つてゐながら、喜んで城を築いて、工事ができあがると同時に、従容として切腹したといふのである。生命を召されるほどの築城師になり得たことを彼れは本懐としたといふのである。これこそ本當のライフワークだ。さぞその城に魂を打込んだことであつたらう！

さうだ、人間、いづれは死んで行く身である。碌々として徒らに生きてゐたつてつまらない。眞に命がけの仕事を成し得て、いさぎよく肉體を滅すことの出来るものは仕合せである。

○  
文章を書くといふことで、もうかれこれ三十餘年をわたしは生きて來た。が、振返つて見ると、實にあはれな、情ないものばかり書いてゐる。必ずしも迂濶に書いて來たわけでもないのであるが、では、どれにお前の魂がこもつてゐるか、命がけの仕事はどれかといはれると、實際おはづかしくて顔があげられない。

日はもうだん／＼と暮れかけてゐる。今にして早く本當のライフワークと取組まなければ、やがて犬死を死なねばならぬであらう。昔の築城師の覺悟が不思議にわたしの心を撲つて、欽羨に堪へない思ひを燃え立たしめる。

—「警窓」・昭和十三年三月十六日—

### 讚のはうへ逃げる

わたくしの知人に書畫が好きで、しよつちゆう何かと集めてゐる者がある。たまに用事があつて訪ねて行くと、きまつて最近に手に入れたといふ幾つかを、時によると十幾つ、或ひは幾十幾つかを順々に長押にかけたり、座敷にひろげたりして見せてくれる。古いのもあれば新らしいのもあり、時にはまたわざわざ依頼して書いてもらつたのだなぞといふのもある。

「どうです？」

主人はすこぶる得意げに鼻をうごめかしていふのであるが、それが書である場

合はとにかく、畫である場合は、といふうちにも日本畫である場合は、わたくしはきはめて曖昧な要領を得ない返辭をするのが常だ。はつきりした返辭の出来るほどには自分の鑑賞力に自信がもてないからである。ごく最近にも、別荘の名に因んで書いてもらったのだといふ柿の繪を幾枚か見せられた。その畫家たちの名前を見ると、さすがにわたくしのやうなもの耳にもよく熟してゐる巨匠大家ばかりであつたが、わたくしはそれらの前でもやはりただ「さあ」といつたばかりで、はか／＼しい返辭はしなかつた。

主人はわたくしの態度などにはおかまひなく、これは枝振の筆勢がどうの、あれは葉や果實の色彩がどうのと、一々の幅について喜ばしげに讚歎の聲をしきりと聞かせてくれたが、それでもなほわたくしはただうなづいて、空相槌を打つ外にはどうしやうもなかつた。知識のないといふことは悲しいものである。

とはいへ、わたくしにはまた、さういふ種類の繪畫に深い關心をもたないこと

に對して、單に知識のない故ばかりでもない多少の仔細が、といつて言ひすぎるなら、多少の自家辯疏がないこともないのである。それは外でもない。かういふ風にして斯ういふ人たちの手に集められる繪畫の多くは、必ずしも繪畫そのものの價值によるのでなくして、畫家其人の世間的名聲によつて珍重されてゐるのであるといふことを、あまりにしば／＼見せつけられてゐるために、いつかそれらの繪畫に對するまじめな興味を大半失つてゐるといふ事である。

とはいつても、勿論、繪畫の價值が筆者其人と共に在ることはわたくしも知つてゐる。けれども、大家巨匠の名によつてのみこれを珍重して、その高價であるべき所以の故に其所藏を人に誇示する心理は、いささかなりとも藝術の分野に身を置いてゐるものに取つては、一種不思議な義憤に似た感情を抱かせられずにはゐないものがあるのである。

ところで、さういふ場合に、それらの繪畫のうちに、たま／＼讚のあるのがあ

ると、わたくしはいつもほつと救はれた思ひがする。といふのは、忽ちにして方向轉換、顧みて他をいふといふ奴で、全く繪畫そのものの價值とは直接に關係のないところで、即ち其讀の意味なり文字なりを自由に批評し讚美するといふところで、所藏者の誇には少しも觸れずに、悠々と其場を切り抜けることが出来るからである。時に或ひは心中ひそかにやりとするくらゐの餘裕をも持ち得ることがあるのである。尤も、南畫などでは、讀もまた畫の一部をなすものであらうかとも思ふけれども、わたくしはさういふ意味での讀をかれこれいほうとするのではないのである。畫と詩との關係とか、畫面の空白と讀の位置との關係とか、或ひは讀の句が自作であらうとなからうと、さういふことには一切無頓著で、即ち繪畫そのものとは全く無關係な、遊離した一個の詩句としてのみそれを取り上げて、自由に、好きなやうに鑑賞するのである。そしてそれには多少の知識をももつてゐる氣がしてゐるので、ここではいささかも悲しい思ひなぞしないで、お茶

が濁せるといふのである。

## 二

もう四十年以上も前のことだが、その頃の好學心に富んだ村落の少年たちを纒かに満足させる設備といつては、ただ村の學者として聞えてゐる人のところへ漢籍を學びに行くことがあつたばかりであつた。御多分に漏れず、わたくしもさういふ少年の一人として、村のうちに漢學の塾を開いてゐた甲斐田立道（りゅうだう）といふ老禪僧のところへ、十歳位の頃から通つて、先づ『大學』の素讀から始めて、『中庸』『論語』と次第に進んで行つてゐたが、そのうちに、この老僧は病氣となつて、とうとう亡くなられてしまつたので、十三四歳の頃からは、村の醫者で、和歌も作れば俳句の宗匠でもあり、漢學者で詩も作るといふ、川崎順道（號烟村）といふ人のところへ、毎晩、夕飯を食べてから漢學を學びに行つた。しかし、今度はも

う素讀ではなかつた。先生は先づ『論語』の講義をなされたが、その『論語』といふ書名についてだけで三晩か四晩かかつたので、講義といふものは大變なものだと思つたおぼえがある。そして、わたくしたちは四人の仲間で、『日本外史』を輪讀した。間違へば先生がそばからなほして下さつた。

一年くらゐも經つて十四五歳になつた頃である。或晩、床の間にかかつてゐる畫幅の讀み方を聞いたのがきつかけで、

「さうだね、みんなも一つ詩を作るといふ。さうすれば、かういふ掛物を見ても、からかみを見ても、字の數を勘定さへすれば、五言か七言か、絶句か律かがわかるし、詩にはまた、平仄だの韻字だのといふものがあるから、その心得さへあれば、くづした字でも見當がつけられる。さうだ、早速みんなで作ることによよう。」

といふ先生の大乗氣なお言葉で、急に『詩語粹金』だの『詩韻活法』だの『詩韻

含英異同辨』だのといふ本をそれ／＼手に入れて、さて、作つたこと、作つたこと！ 梅の木などは誰の家にも必ず二本や三本はあつて、梅の花など少しもめづらしくないのかかはらず、夜、ランプの灯の下で、どこか遠くの谷間に綻びかけた早咲きの二三輪を見つけて大いに喜んだり、生れた家にずつと住んでゐながら、聞いたこともないほととぎすの聲に故郷を非常になつかしんで血を吐く思ひをしたり、胡笳などさへも悲しく聽いたりしたのである。いつか漢文の輪讀などは止してしまつて、そのころはたゞ『文章軌範』の講義を聴くだけに止まつた。

が、この先生は前にもいつたやうに、外にもまだ俳句の宗匠でもあれば、和歌をも作り、書もうまく、畫も四君子くらゐはさら／＼と達者にこなして、更に篆刻をしたり、小説をさへ作つたほどの多才多能の人であつたから、わたくしなどもついそれに影響されて、時にはまた和歌を作つたり、俳句を作つたり、しきりに漢文を作ることをおぼえたりした。今にして思へば、なんとまあ慾を深くかいた

ものだつたらうといふ氣がするのである。

けれども、その先生は本職がお醫者さんであつたから、ぶら／＼と一瓢を携へて山野に吟杖を曳くといふやうなことをしてゐる暇は容易に得られなかつたので、わたくしたちも所謂實物指導はつひに受けることが出来なかつた。ただ非常に梅を愛して、その庭園から先のはうへつゞいた畑までをも一帯の梅園にしてゐられたので、まだ寒い早春の頃、或ひは月下に、或ひは暗夜に、みんなでそよりにそこを徘徊して、了したる樹影の地上に落ちるのを賞歎したり、馥郁たる暗香のあたりに浮動するのに逸興をおぼえたりしたことなどはあつた。で、一二年して、いくらか平仄や韻字なども諳んずるやうになつてからは、もう一人の先生に——やはりわたくしの村の人で、町の登記所の所長をしてゐた望月直矢(なほら)(號笛水)といふ人につれられて、時々の日曜日には、はう／＼の小學校や寺院などを會場として催される詩筵へよくでかけて行つて、なんとといふことか、臆面もなく、大人

にまじつて題詠を競つたりした。

三

ところが、さうかうするうち、時代はわたくしの上にも急湍をなして移つて行つた。十八歳の時に、わたくしは今までとは全くちがつた方面に職を求めて、縣の中央都市へ出て行つたが、それからといふもの、主として西洋の學問のはうに重きをおかなければならないやうになつた關係から、漢詩などは一切放擲した。けれども、當時なほしばらくの間は、友人に手紙を書くとき、漢文くづしでむづかしいといふ非難をよく受けたので、一時は全く漢語をつかはないことにしようとして考へたことなどもあつた。

かくて何十年、所謂烏兔匆匆といふ奴で、いかげんに年を取つて來てしまつてから、不思議なもので、一種のノスタルヂヤとでもいふのであらうか、漢詩に

對する愛着がまた起つて來た。作らうとはまだ思はないが、讀んで味ふことには可なりに強い興味をおぼえてゐる。と、やつぱり因縁でもあらう、今から四年前の昭和八年の初夏には、久しく親しくしてゐる年下の友人が、亡父の漢詩の遺稿を刊行しようとするのに、其校正に困つてゐるのを見て、進んでこれを引受けてやつてやるやうな事が起つたが、その翌々十年の初夏には、なんといふ思ひがけない懐しさであつたらう、四十年の昔、望月笛水先生の許で一しよに韻字を探つたりした舊友の篠原茅庵から、新たに印刷に附した詩集を贈られたのである。茅庵は三十年餘を司法官として各地に送り、昭和七年の春、樺太の裁判所長を最後に退職して、今は悠々と自適の生活をしてゐるのであるが、かれの詩集を繰返して讀んでゐるうちに、わたくしは自分もまたいつかすでに、かくは老いけるものかとしみじくと顧みさせられずにはゐなかつた。

濁流無際涯。渺々山河沒。蜀道險應踰。狂瀾非可越。

老來思渺漫。養性憚無觀。未悟窮通訣。稍知容膝安。

茅屋人來少。復無景物牽。孤生多感慨。白首不堪憐。

とはいへ、わたくしはまだ「稍知容膝安」の境涯にも到り得ずに、相變らず「未悟窮通訣」で、狂瀾をもなほ越えようと努力しなければならぬところにあるのである。憐むべし此老骨などもまだ言つてはゐられないところで風塵にまみれてゐるのである。

ところで今年の今はまた、田山さんの漢詩の一部をその全集のうちに收めるために、わたくしは其編輯に當つてゐるが、ここには故人が晩年の日常生活を、らくらくと、まるで日記でもつけるやうに詠出してゐるのが見られると共に、大正から昭和にかけての文壇の人々に對する温かい感懐なども、しきりに披瀝せられてゐるのが窺はれる。

窓外一梧桐。擦擦綠掩檐。障陽又遮月。好事不能兼。



この梧桐には、田山さんが少年時代に、古桐軒主人といふ漢詩人としての雅號を、ナイフで幹に彫りつけたのが、そのまま木と共にだんだん大きく成長して残つてゐたので、特に感慨も多かつたやうである。

隣家造汽井。日夜鞭聲喧。聽做濤難得。如何似瀑奔。

書齋の北窓に向つた隣家で、井戸水をモーターで引きあげるやうにした。その音の不愉快でうるさいのを、たびたびわたくしなどにもこぼしてゐられたが、ここではそれを濤の音にして見たり、瀑の音にして見たりして、わづかに自ら慰めようとしてゐられる。

學佛不歸佛。廢盃又把盃。世情盡難盡。心未十分灰。

晩年、しきりに佛典を讀んだ頃の心境である。理窟は理窟、情は情。容易に解脱しきれないところに藝術家田山花袋の眞面目が躍如としてゐるともいへよう。心いまだ十分に灰ならずといふところに、悟りきれない歎聲を聞くやうな氣もす

るが、又、必ずしも歎いてばかりゐるのでないといふやうな氣分も窺はれる。  
その他

夜坐、憶芥川龍之介

君今在何處。我坐沈寥間。槍岳紀游讀。一燈渺夜山。

自註槍岳紀行  
芥川龍之介所作

與島崎君語

君似昌黎師百世。我如東野幾窮愁。偶然相見還相話。燈下宵深兩白頭。

憶諸友

有明已久濶。如蟾杳天半。雙頰肥鯁瘦。否得同高岸。藤村渺詩心。孤高如遁竄。行騰約何全。江山一漫漫。國男林深居。左右書凌亂。非透心難止。邃學史一貫。木城今如何。五十髻將粲。夜深翳一燈。孜孜不問絆。而我惟碌碌。幾日心難散。雪雪穿泥屐。夜夜仰星燠。

などと抄出しはじめたら限りがないから、止めるが、かういふ風に漢詩には一

種の郷愁を感じてゐるわたくしであるから、すなはち見當のつかない畫を見せられると、忽ち讚のはうへと逃げて行く次第なのである。

—『南畫鑑賞』・昭和十二年四月二十四日—

## 後記

三十年といへば一世代である。この一世代以上をわたしは文筆生活にくらして來た。その間には雑誌記者をしたり、新聞記者をしたり、雑誌の創刊主宰をしたりしたこともあつたが、大部分は一介の文學人として、隨筆、批評などの雜文を書いたり、西洋文學の翻譯をしたり、創作をしたり、後には少年少女のための著述をもしたりして來た。今もしてゐる。年少にして文學に志したころには、もちろん、進んで行くべき目途は是れとはつきりさだめてゐたのであるが、恒産のない身であつて見れば、まづ生活の資を得なければならぬ。一途に目標へ向つて突進するといふわけにも行かなかつた。そこで、ついあつちへうろろ、こつちへうろろ、あてのあるやうな、無いやうな彷徨をしてゐるうちに、いつか日も將に暮れようとしてゐるといふわけだ。いはばまあ、人生の定石街道をわたしも辿つて來たといふところであらう。

とはいへ、長い間のことである。その彷徨のあひだあひだに、雑誌や新聞その他に書いた雄筆みたいなものも、かなりの分量にのぼつてゐる。尤も、その大部分は、いはゆるジャーナリスチックなもの、當然の運命で、そのときどきに消えてなくなつてしまつてゐるが、どうかいふ拍子で、切抜なんかの残つてゐたものもある。その中で、興味の一般世間的のものは、かつてささやかな隨筆集としてまとめたことがあるが、興味の主として文壇的、文學人關係のものは、いつかゆつくりと機會を得たら、多少は系統の立つた回想録として、在り經て來た明治大正時代の文學を語ることにしたいものと、實は、そのままそつとしておいた。

ところが、今、時代は讚歎すべく歡喜すべき歴史的大轉換をしてゐる。この大東亞戦争における皇國日本の大躍進は、年をしたわたしたちにもまだまだ振返つて過去を見てゐる暇などは與へさうにない。前進し、拓開して、大東亞文化の建設に應分の力をいたさなければならぬ責務をこそ感ぜしめる。のみならず、この湧き起る興隆の機運に際會して、層層たる個人の貧しい小さな體驗などが、今さら何であらうといふやうな觀をすら抱かし

めるものがある。

けれども、現在は過去の堆積であり、未來は現在から出發するものである以上、見やうによつては、いかなる小さな過去といへども、漫然とただ無みしてしまつていいといふものでもなからうとも考へられる。實際、どんな小さな個人の貧しい經歷の中にも、雞肋といはれ得るくらゐの部分はあるものだ。

そんなこんなのおもはくを懐いてゐるところへ、たまたま砂子屋書房主人が、明治大正時代の文學に關心をもつ人たちに、多少の興味もあれば研究資料にもなりさうなものと、例の残つてゐた切抜の中から、煩をもいとはず、深切にも、まづ三十幾篇かを摺選してくれられたので、わたしはここにその厚意を甘んじて受けて、『明治大正の文學人』の一書を作成することにした。望外の仕合せとはかういふのをいふのであらう。ありがたいことである。なほ、文學人といふのは、不熟な、生硬な言葉かも知れない氣もするが、世に科學人といふのは通用してゐるのだから、かまはないのではないかと考へる。文士、文人、文學者、どれでもいいやうな氣もするが、又、どれでもびつたりしないやうな氣もする文學者の人

人をひつくるめて呼稱したのであつて、その中には、當然、文士でも、文學者でも、文人でも通用する人人もむろん入つてゐるのである。又、別個の區わけからすると、師匠も、先輩も、友人も、知人も、自分自身も入つてゐるのである。つまり、この書には、さういふ人人や、さういふ人人の仕事をしてゐた所謂文壇やに對する追憶、隨感、研究、批評のさまざまが收められてゐるといふわけである。

ところで、批評とか噂とかいふものは、いかに公平に、客觀的に、妥當性のあるものにしてしようとなつて見ても、得て偏したものと成りがちである。況して十年、二十年、三十年以前のそれを、今日から振返つて見た場合においてをやだ、われながら、「とんだことだ」と鼻じろむやうなものもあれば、「いい氣になつて」と申譯のない氣のものもあり、又、「をかしくつて」と苦笑させられるやうなものもある。けれども、これを書いたその時時においては、全く本氣で、正直に、信じた通りを筆にのぼせたのだから、今さら、それがたわいのない幼稚なものであらうと、客氣滿滿で鼻持がならなからうと、くどくどと鈍な理窟をならべたやうなものであらうとも、なまなか添刪加減などすべきではないで

あらう。やはりそのままにしておいて、さういふものの中からさへも當時の様子をそれとなく窺ひ見てもらふべきであらう。そこにこそ實録としての多少の價値もあらうといふものだ。

ただ校正し終つてわれながら驚くと共にさびしい氣のしたことは、ほとんどすべてが求められて書いたものばかりであつて、われから進んで、書きたくて書いたものがほとんどないといふことである。こんなところにも、わたしの生き方の自主的でないことがあつてゐるとも見られるのである。日は暮れかけても、これからは少し調子をかへなければならぬといふ氣がしてゐる。

昭和十七年三月十一日

明大正の文學人



明大正の文學人

⊙ 定價二圓五十錢

昭和十七年三月三十日印刷

昭和十七年四月五日發行

著者 前田 晁あきら

發行者 山崎 剛平さだひら  
東京市下谷區上野櫻木町二七

印刷者 綾部 喜久二きくじ  
東京市神田區小川町一ノ二

發行所 砂子屋書房さごや  
東京市下谷區上野櫻木町二七  
振替東京七五〇八九番  
電話下谷(83)〇五五四番  
會員番號一一三〇一三

配給元

日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二ノ九

短篇小説集

尾崎一雄著 竹 盗 人

氏の初期の短篇集を知る必讀の足跡

四六判函入二六〇頁 定價一・五〇(千一四)

榊山潤著 上海 戰 線

日支事變勃發當時未だ爆彈下にありし動亂上海を描く

四六判略装二六四頁 定價一・二〇(千二〇)

榊山潤著 苦 命

亂戦下の上海を描く「苦命」新機軸の「桃太郎」其他

四六判函入三〇〇頁 定價一・五〇(千二〇)

尾崎一雄著 續 暢 氣 眼 鏡

個性追求の極そこから生れる明朗人生ユイモアに溢る

大貫松三氏装幀本 定價一・二〇(千二〇)

丸山義二著 田 植 酒

農民文學の雄たる氏の數多き短篇中の白眉八篇を収む

四六判函入三〇四頁 定價一・五〇(千二〇)

鶴田知也著 北 邊 記

北海道ものに於て特異の存在である鶴田氏の短篇八つ

四六判函入二二三頁 定價一・七〇(千二〇)

太宰 治著 女 生 徒

女生徒富嶽百景など鬼才大宰氏の世評高き七篇を収む

四六判美本三一五頁 定價一・八〇(千一四)

田畑修一郎著 乳 牛

名作帆柱の方他七篇を蒐めた純粋作家田畑氏の近作集

四六判函入二九五頁 定價一・六〇(千二〇)

川崎長太郎著 裸 木

一筋に文學道に生き抜いてきた氏の滋味あふる短篇集

四六判函入三六九頁 定價一・八〇(千一四)

瀧井孝作著 結 婚 ま で

素朴簡潔な筆致の裡に深き人生の姿を漂す代表的名作

四六判函入二三九頁 定價二・二〇(千二〇)

尾崎一雄著 夢 あり し 日

住み悪き世をいかに生き抜いたかか好短篇二十作を蒐む

四六判函入三五七頁 定價二・二〇(千二〇)

小田嶽夫著 泥 河

暗雲漂ふ上海や文豪魯迅を描いた最近作七篇より成る

四六判函入二六六頁 定價二・〇〇(千二〇)

岡田三郎著 伸 六 行 狀 記

身を以てロマンを追求する氏の伸六もの一編の力作集

四六判函入三一〇頁 定價二・〇〇(千二〇)

長篇小説

和田傳著 沃土

大貫松三  
装幀表紙  
お銀の繪

¥1.50  
(〒14)

第一回新潮賞受賞作品  
新興農文學の最高峰

外村繁著 草筏

支那紙表  
紙美本三  
百五十頁

¥1.70  
(〒14)

第五回池谷賞受賞作品  
江州商人を描く雄渾篇

榊山潤著 歴史

第一部  
第二部

吉田貫三  
装幀四  
百八十頁

合本 ¥2.50  
(〒 14)

第三回新潮賞受賞作品  
明治維新の秘史を描く

和田傳著 隣り同志

大貫松三  
装幀三  
五十枚繪

¥1.50  
(〒10)

農村二家の葛藤を描く  
名作沃土の姉妹篇繪入

徳田秋聲著 心の勝利

吉田貫三  
装幀七  
五枚挿入

¥2.80  
(〒14)

假装人物に續く第二の  
巨弾四百八十頁の大作

田畑修一郎著 高間房一氏

醫師

六判函  
上製三  
百二十頁

¥2.00  
(〒14)

三歳苦心の書卸し長篇  
著者畢生の大作品なり

終